人生最大逃避行

潮賀 雷

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人生最大逃避行

【Nコード】

N1403L

【作者名】

潮賀 雷

【あらすじ】

この話は「黒子のバスケ」の連載世界 読切世界パラレルトリック話です。

読み切り黒子 連載世界

連載黒子 読み切り世界

へ、トリックしてしまう話です。

何故トリップしてしまったかは謎です。

究明する気もありません。オカルト話によくある話、程度の認識でお願いします。(時空のおっさんとか、ぬぐべくの枕返しとか)読み切りを読んでない方は無限に広がる平行世界に迷い込んでしまった、と思ってください。

登場人物（必読）（前書き）

この話は「黒子のバスケ」の連載世界 読切世界パラレルトリップ話です。

読み切り黒子 連載世界

連載黒子 読み切り世界

へ、トリップしてしまう話です。

何故トリップしてしまったかは謎です。

究明する気もありません。オカルト話によくある話、程度の認識でお願いします。（時空のおっさんとか、ぬぐべくの枕返しとか）読み切りを読んでない方は無限に広がる平行世界に迷い込んでしまった、と思ってください。

物語は読切黒子が連載世界にトリップした所から入ります。

読切世界は連載世界と違う点が多々ありますので、登場人物を確認の上、お読みください。

読切世界は設定、人物が少ないため、連載世界の人物設定を引用する場合がありますので悪しからず。

それでも良い、見たい、という方はどうぞお読みください。

亀更新ですが精一杯頑張らせていただきます。

登場人物（必読）

連載版：：黒子テツヤ

基本無表情で笑顔も分かるか分からないくらいしか出さない
上下関係問わず常に敬語

愛読書は近代文学

好物はバナラシエイク

キセキの世代のシツクスメン

帝光の“勝利絶対主義”に疑問を感じている
火神を“光”と称し自らを“影”として慕う

読み切り版：：黒子テツヤ

基本無表情だが連載よりは等身大の16歳

余裕を持った微笑みが多々見られる

愛読書はニーチェ詩集

ポエミイ（笑）

慕った相手又は同級生にはため口であり、マイペースで呑気な性格
なせいかな他人をイライラさせることも

キセキの世代の五人の内の一（読切は五人しかいない）

勝利に執着気味

照栄中学出身

荻原を“太陽”と称し自らを“月”として慕う

連載版：：火神大我

帰国子女

大食いな上に性格は餓鬼っぽく、デリカシーに欠ける
アメリカから帰り日本のバスケの弱さに絶望するが、黒子との出会いによりキセキの世代を倒すと言う目標を得る
常に強い相手を求め、熱い戦いを望んでいる
弱い奴には基本的に興味は無いが黒子の戦い方、姿勢に理解を示す。
黒子の“光”として行動を共にする。

読切版：：荻原シゲヒロ

(連載の火神のポジション)

帰国子女

191cmの長身

傲慢な所があり、自分がNO.1だと思ってるので、キセキの世代と言っただけでちやほやされる黒子に苛つくが後に和解
黒子の姿勢に感銘し、土下座して謝る程、自分の気持ちに素直な所がある

黒子の能力、戦いへの姿勢を尊敬している

連載版：：黄瀬涼太

キセキの世代の内の一人

コピー能力つき

モデルをしているため、イケメン(死語)

勝利に対して並々ならぬ興味、依存を示している

黒子に対しても以下同文

読み切り版では登場していないが、それらしき人物としてキセキの世代にいたので、読み切り世界でも登場してもらいます。

連載版：：日向純平

読切版：：柏木

どちらもキャプテンとしてのポジションは変わらないが、柏木は日常的に二重人格。

日向はクラッチのみ二重人格。

比較的に柏木の方が後輩に対して丁寧（多分）。

読み切りは監督がいないので、柏木に監督＋主将を兼任してもらいます。（いるかいないか分からないので）

連載版：：相田リコ

監督の立場として黒子達を見守る。

何か気に入らないことがあれば暴力に訴える癖があり、時々男言葉が顔を出す。育てることに生き甲斐を見いだす。

涙もろい面もあったり。

読み切りではい wasn't でしたが、読み切り世界にも出る予定です。

随時更新させていただきます。

prologue

Sunday night

00 - a b . (shadow + moon ?)

月光がカーテンの隙間から差し込み煌々と部屋を柔らかく照らす。普段ならば電気をつけて机に向かっている筈の時間だが、何故か今日はやる気が起きずベッドに寝転がって薄暗い部屋の天井を見つめていた。

『月は光となり影を生み出す。其れ故、光と影は表裏一体。突き詰めれば同義を指し決して崩れぬ理と言えよう。また、太陽の光は月の光となりこれまた付かず離れず。されどもこれもまた世の理にして不変の物である。』

図書館の本を漁っていた時に見つけた小説の数行に渡る文字の羅列。拙い言葉を無理に並べた無粋な文とも言えそうだったが、何故か黒子の目にそれは止まった。ちりちり、と目の奥が疼き強く目を瞑って誤魔化す。もう一度、と目を見開くと手元にあったその本は無くただ上向いた掌を視界に映すだけであった。足元に落としたのかと慌ててしゃがみ込むも何も無った。確かに、手に取って読んだ筈だ。其れ故に自分はあの一節を覚えているのだから。

網戸から生温い風が入って来てパタパタ、とカーテンが揺れる。それと同時に綺麗な円を描いた月が網膜に焼き付けられる。

…眩しい。
そう光があつてこそ影があり。
太陽があつてこそ月がある。
不変の事象。
揺るぎ無い理。

ブルブルブルブブツ
耳障りな音がして首を傾げる。思考に耽ろうとしているのを邪魔されて為か若干黒子は眉を寄せた。
…メール？誰から…
がしがしと頭を掻きながらベッドから降りると音源を探す。
硬質な音がするから机か床で振動しているのだろう。薄暗闇に光がちかちかと光るのを見つけ光源に近づく。

黒子テツヤ

メール受信？…

黒塗りの携帯のサブ画面に映された文字を見て眉を潜める。それは、自分の名前が表示されていた。
恐る恐る手を伸ばして携帯に触れる。ひやりとした感触がして身体中に鳥肌がたった。

…これは、見てはいけない気がする。
ざわざわと揺れるのは第六感だろうか、ごくり、と唾を飲んで勢い良くパネルを開く。
薄暗がりの中、光源が灯った。

メール送信者は黒子テツヤ、題名は無題、本文は白文……。

…もしかして、自分が間違つて送ってしまったのかもしれない。そう決め込んで携帯を投げ出す。

先程までに感じていたぞくりとした感覚は失せ、ただ再び暗闇に身を投じた。

夢を、見た。

自分は最初で最後の逃避行をしている。

そして、人生最大の宝探しをしている。

穏やかな風と、置き去りの自分がやけに寂しくて。

知ってしまった真実は余りに単純で、涙が出た。

それでも、僕の中の何処かに君がいるのだ、と思っただけならさらに泣けてきて。

目を覚ました時、僕は泣いていた。

頬に流れる涙の後が何重にも重なっていて湿り気帯びている。それでも、再び涙は溢れてきて、果たして自分は何故泣いているのか、一体何の夢を見たのかただ疑問だけが頭の中に渦めいた。

手でごしごしと涙を拭いてもそれは溢れて来るので、しょうがないと諦めて再び目を瞑る。

涙が、再び頬を伝った。

t o b e c o n t i n u e d . . .

prologue (後書き)

やっとプロローグを書きました。方針が決まったので。このプロローグは連載黒子でもあるし読切黒子でもあります。

夢の内容は「少年の唄」さんのお題からお借りしました。

091224

迷走世界の入り口へ (light & moon)

Monday

01 | a . (light & moon)

不意に固い感触がして意識が覚醒する。

酷く緩慢な動作で起き上がるとそこは夕闇に包まれた教室だった。机に突つ伏した体勢だったせいか腕の下が赤くなっていた。

おかしいな、先程まで部活をしていたのに、それとも夢だったのか。

ぼんやりとした視界で時計を探す。

時計を視界に入れると同時に、目を見開いた。

5:42、部活がもう始まっているではないか。

ガタン、と上手く動かない体を右手で支え立ち上がる。

左足を床につけた瞬間、上体が傾き騒々しい音と共に視界が反転した。

左足が痺れて感覚がない。これでは歩くことすらままならないと、転んだ拍子にあちこち打った場所をさする。

……だから机で寝るが嫌なんだ。

仕方なく左足をマッサージすると少しずつ感覚が戻ってきて安心する。

「…早く行かなきゃ、荻原君が心配する」

独り言を呟いて自分を叱咤すると同時に立ち上がる。

よし、これなら歩いていくうちに痺れは取れるはずだ。

「荻原君の怒った顔見たくないなあ」

と呟きながら教室のドアの取っ手に手をかけようとした瞬間、独りでドアが開いた。

「へ？」

目の前に黒の色彩が広がってきて驚き、後退りすると教室の扉の高さをゆうに越えている赤髪の男子がいた。

目を見開きながら“荻原君並みの身長の人って居たっけ？”とその男子を見上げる。

精悍な顔付きをしているその男子は自分と同一年には見えがたい。そんな風にじろじろと見ていると不意に違和感を感じた。

何でこの男子はぶつかってこない？

僕の存在感の薄さは自身がよく知っている。

以前もこんなことはあった。

突然開いた扉とぶつかってくる衝撃。

相手が自分に気づいていないのだ。

余りの黒子の存在感の希薄さに。

なのに、何故この男子は立ち止まって僕を認識しているのか？

認識？

不意にその赤い瞳と目がかち合う。

「あ……………」

じろり、と睨み付けられ体が萎縮する。

荻原君に睨み付けられた時だってそこまで動揺なんてしなかったのに。

心がぐちゃぐちゃになりそうなくらいの衝撃と色濃い恐怖感、不安感が身体中を駆け巡る。

これならぶつかった方がマシだ、と動くことも忘れてその瞳を見詰めていた。

「…………お前、」

赤髪の男が口を開くと同時に直ぐ様死角に逃げ込もうと体が動く。早くこの場から離れたい、そんな一心だった。

男の死角に滑り込む一瞬前、黒子の腕が捕まれた。

「黒子！！てめえ部活に遅れんな！！何してたんだよアホ！！」

鼓膜にびりびりと響く大声に戸惑いながら、その手を振りほどこうともがく。

「離して下さい！！！」

「うっさい！！ほら、さっさと行くぞ！！」

有無を言わずに引きずられていく。振りほどこうにも力が強くて敵いもしない。

何で、こんなにも恐怖心が沸いてくるのだろうか。

そもそも僕はこの人を知らないのにどうしてこの男子は僕の名前を知っているのだろうか。

ぐるぐると不安定な気持ち渦巻き、駈けていく廊下から臨む夕方の風景と混合して視界を歪ませます。

不安が、恐怖が臨界点までに達し、

「…………離して！！！」

とあらん限りの声量で叫んだ。

瞬間、赤髪の男子が歩みを止めて振り向く。

もう一度強い口調で

「…離してよ」

と言うと、男子が手を離れた。

少し赤くなった腕を見ながら渦のように巻き上げられた気持ちが競り上がってくる。

喚き叫びたい気持ちを必死でこらえ、唯一堪えきれなかった感情を口に出した。

「…痛い」

本当に、じんじんと痛むそこに眉を潜めると、「ごめん、とばつの悪そうな声が帰ってきた。

その音色がやけに相手を労るように聞こえ顔をあげると、赤髪の男子は心配そうに

「悪かったよ、強く掴みすぎた」

と呟いた。

その表情は、先程自分が感じた恐怖感とは酷く駆け離れていて少し戸惑う。

咄嗟に

「ううん、いいよ。大丈夫だから」

当たり障りの無い返事を返した。

なんだかなあ、と相手を見返すと怪訝な瞳が此方を見ている。

「……黒子、お前しゃべり方どうした」

「うん？どうしたの、何か変？」

「いや、ため口じゃん、いつもは」

敬語、と言う男子の言葉を遮って先程から疑問に思ったことを

「ねえ、そんなことより何で君は僕の名前を知ってるの？君の名前は？新しくバスケット部に入ったの？だから僕を呼びに来たの？」

と矢継ぎ早に浴びせた。

「……………は」

男子は豆鉄砲を食らったかのように目を見開いている。

「どうしたの？」

と言うも屁の字に曲げた口から言葉は出てきそうも無い。

仕方ないなあ、と眉を潜めながら黒子の関心は既に他に移っていた。

「ね、荻原君もう部活に行ってる？怒ってるだろうなあ、早く行かないきゃ」

わー荻原君怒ると怖いんだよねーと呑気そうな声が廊下に響く。

不意に窓の外を見るといつの間にか立ち込めた暗雲が薄暗い空が広がっていた。

「今日は月が見えないかもなあ……………」

と呟くと突然頭を大きな手のひらで捕まれる。

「わあ、何!？」

「黒子、お前どうした」

固い声が頭上から響く。

それは何故か戸惑い、怒りに満ちているようだった。

「……………どうしたもこうしたも、だから君の名前は何？」

呼ぶ時困るじゃん、名無しの権兵衛って呼ばれたい？と返すと視界が急に回転する。

「…人をおちよくるのも大概にしるよ、何ふざけたこと言ってんだ」
「おちよくるって…失礼だな、ふざけてるのは君の方じゃん」
「黒子！！だから何っ…」

「はい、ストップストップ！！」

バツシーン、と刻み良い音と共に側頭部に衝撃が走る。

「何やってんだよダアホ」

そこには、黒子の見知った人物が佇んでいた。

「キャプテン！！」

「いや、黒子がふざけたこと抜かすから」

しどろもどろに言い訳を繰り返すとする火神を尻目に日向は

「あーもう良いから、早く部活すっぞダアホ、カントクのプロレス技かけられなくなったらはよ来い！！特に黒子！」

と言った。

「はい」

キャプテンの言葉にほんの少しの違和感を感じながらも、見知った顔に安堵した黒子はそのまま頷いた。

「黒子、後で覚えとけよ」

隣で名前も教えてくれない男子が何か言ったがあえて無視をする。

ボクにとって大切なものなんてひとつ。

「柏木キャプテン、荻原君怒ってましたか？」

「……は？」

二人の声が重なって聞こえ不思議に思いながらも言い直そうと口を開く。

「いえ、だから」

「黒子、今俺の事なんて言った？」

キャプテンの困惑した声色を聞きながら

「え？ 柏木キャプテンでしょう？」

と返す。

「日向だけど」

あれまさか先輩の名前をすっぱぬかしたなんて礼儀正しい黒子君はそんな馬鹿なことしないよなーあれー？、となんだか笑顔が黒くなったキャプテンを見て後退りをする。そんな黒子を見かねてか赤髪の男が言う。

「キャプテン、なんかさっきから黒子が変わんだよ、っですよ。俺の事知らないって言ったりため口だったり挙動不審。」

「どーした、熱でもあるのかよ」

ひょいっと腰を屈めてのぞきこむキャプテンを見つめて問いかける。

「……キャプテン、質問があります。……バスケット部に、荻原君っていますか」

なんでこんなことを聞いたか分からない。

ただ、どんな世界でも荻原君がいれば、太陽がいればどうにかなる気がした。

彼さえいれば、ボクは。

「……荻原？そんなやついないぞ、やっぱり熱あるんじゃないねえのか」

目の前が、真つ暗になる感覚なんて、初めてだった。

二人の声のエコーの様に何度も重なりあって何度も響いた。

「……いない？」

そう呟くと直ぐ様、踵を返し教室へと向かう。

「おい！？黒子!？」

赤髪の男が叫んでいるが、耳に入ってこなかった。

「すみません、ボク、部活休ませていただきますね」

そう言うと猛然と走り出す。

鞆、取りにいかなくては。

いやその前に確か教室の出席簿を確認して、一回部活に行こう。

もしかしたら二人が悪戯でも仕掛けているかも、とどうしようもない思考が頭を回って、回って。

……………気持ちが悪い。

たどり着いた教室で出席簿を漁る。

たしか、教卓にあったはずだ。

彼の、名前が確かに、あったはずだ。

「……ない。」

代わりにある名前は、“火神大我”という名前だけ。

バタバタと廊下から響く音が耳を右から左へとすり抜けていく。

「黒子！お前本当にどうしたんだよ！？」

近づいて来た赤髪の男の声も、心に響くものなどあるはずもなく。

「……太陽か、いない」

ぽつり、と震える声が教室の空気を震わせた。

夕焼けの空は既に暗雲に覆われ暗い。

そんな暗闇に波紋を広げるようにぽつり、ぽつり、と言葉を紡ぎ出す。

「太陽がいないと、月は輝けない」

「黒子？」

バシッと、恐る恐る肩にかけようとする掌を払いのける。

はっ、と気付いたときには既に遅く、怒気と戸惑いが入り交じった赤い瞳が僕を睨んでいた。

でもどうすることも出来ない。

「……………ごめん」

そう呟いて暗闇に包まれた廊下を駆けていった。

窓、窓、窓に暗い闇だけが映っている。

微かに街の光が見えたがそんなの気休めでただの偽物、イミテーションだ。

「…嘘だ」

本当の、光が無いなんて。

「嘘だ」

嘘。

その一文字がボクの心を支配する。

嘘。

「う、そ、だ」

「……いない」

荻原君が、いない。

出来る限りの搜索はした。

彼の痕跡があるだろう場所に足を運んだのに。

あるのは、何度も見かけた名前“火神大我”だけ。

何処にも、存在していない。

太陽が、ボクの太陽が。

いない。

どうすることも出来ずに立ち止まり空を見上げる。

暗雲の隙間から、僅かに弱々しい光の月が覗いた。

「……………月だけ、ひとりぼっちだ……………」

“月”は“太陽”がいないと、輝けないのに。

その“太陽”が居ないなんて。

「……………荻原、くん……………」

どうする事も出来ぬまま、ただ彼の名を呼んだ。

Monday

迷走世界の入り口へ

type:01 - a | l i g h t & a m p ; m o o n

こうしてボクはおかしな世界に迷い込んでしまった。

..to be continued

迷走世界の入り口へ (Light & moon) (後書き)

とうとう書きちゃいました:orz

読み切りの黒子君は連載よりは感情表現が豊か。

比べれば、の話ですが。

なので思う存分混乱してもらいました。

そしてかなりのマイペース能天気

ぶっちゃけた話、連載同様相手(火神、荻原)を『光』、『太陽』

認定する辺りは自分勝手(A)。(。。(ソレイツタラアカ

ン!!

090623

壊された完成世界 (sun&shadow) (前書き)

荻原 (読み切り) と黒子 (連載) のお話です。

壊された完成世界 (sun & amp ; shadow)

Monday

01 - b .) sun & amp ; shadow)

昔より日の暮れる夕方は魔物に逢うとされ恐れられてきた。
それ故に、この時間は逢魔時おっまがときと云われ人々に畏怖されている。

しかし、現代の若者にとっては、分かり得るはずもないその名称。
光に溢れ、夜中さえも煌々と光を放っている現代では、夕方などは
恐るるに足したことはない。

以前、資料集によって見つけた衛星写真。

夜の日本のなんと光々しいことか。

日本列島の形をなした光の集合体。

溢れんばかりの人工の光は、昼夜問わずに日本各地で瞬いているの
だ。

光満ちた異質な光景は、すでに慣れによって日常と化している。

ジジッジッ . . .

道路に一定感覚で立て付けられた電灯に光が灯る。

ああ、これが本当の光ならば少しの希望と落ち着きが得られるのに。
そう心の中で黒子は呟いた。

「すっかり暗くなったな」

黒子の隣を歩く男がそう呟く。

同意を求めて言う言葉とは分かっていたが、黒子は押し黙り沈黙を守った。

「なあ、黒子。お前どうしたんだよ？表情固いぞ？」

「……………」

「何時もの笑みはどうしたんだよ」

いや、無くていいけど。あの笑みはなんかムカつくし、とぶつぶつ言う男を黒子は見上げた。

「あ、やっとこっち見たな」

にっ、と笑うその表情は明らかに人の良さそうそのまま、此方に信頼を向けているのが瞬時にわかる。

「……………」

しかし、黒子にとって、それは不思議としか言いようがない。
何故なら。

「君は……」

誰ですか

そう、言葉を紡ごうとした口をつぐむ。

「おっ、何？何言ったんだ？」

よく聞こえずにその男は腰を屈めて黒子に近づく。

しかし、ふるふる、と首を振る黒子からは二度と声は帰ってこなかった。

「……まだ気分悪いか？部活途中に倒れたもんな、大丈夫か？」

少し間を置いてこくん、と頷く黒子を心配そうに見る男。

髪から覗くその男をもう一度見る。

つり目の中に光る強い意思を宿した薄茶色の瞳。

真っ直ぐと伸びた眉毛は一層その男の精悍な印象をあげている。

頑強そうな体格に優に190は越えているだろう身長。

側頭部は黒髪、中心は金髪の頭は派手で人目をひく。

恵まれた体付きをしている人なんて限られている。

僕の近くに居る人でそんな人は一人しかいない。

その名前を呼びそうになって慌てて口を閉じる。

隣に居る男は、その人ではない。

「しかも起きたと思ったら今度は拳動不審だしさ」

本当に、どうしたんだよ？と覗き込むその瞳から逃れようと、黒子は後ずさりする。

そっだ、どうして。

どうして僕はこんな訳の分からないところに居る？

ジジッジジッ・・・ジッ

瞬間、電灯の光が消える。

辺りの住宅街に光は何故か無い。

逢魔時のこの時間にしては、あり得ない光景だ。

暗闇が、身を包む。

ふ、と足元を見る。

影がない。

暗闇が、影を掻き消し、淡々と存在を消して行く。

ああ、そうか。

「光がないからだ…」

ぼつり、と呟く黒子の瞳には光は無くただ虚ろな青い瞳が上下左右に揺れるだけ。

「黒子、お前」

隣で聞き慣れない声が聞こえた途端、黒子は走り出した。

僕は、おかしくなってしまったのだろうか？

不意にそんな思いが浮上する。

教室で居眠りをしていたのは覚えている。

しかし、目を覚ますとそこは体育館内だった。

視界に映る体育館の天井を目を見開いて見つめると、「黒子」と自分を呼ぶ声があった。

その声の調子から火神君かな、と横を向くと見知らぬ男子が此方を心配そうに覗き込んでいる。

もう一度、「黒子」と言う声。

再び聞こえた声は、全く見知らぬ物だった。

「あ、え……………？」

「黒子、大丈夫かよ？」

急にぶつ倒れたりして気分が悪いならそう言えっの……！と言いつつ、その男子は黒子の頭部横の床をこつこつと指で叩いている。

「だ、誰です……………か」

目の前にいるのは、知らない、人。

「はあ？……お前やっぱり頭打ったのかよ？」
その男子がキャプテン、と呼ぶと見知った人が視界に入る。

「キャプテン、あの……」それに安心し、問いかけようとするも、
「黒子、お前は休んどけよ。無理して体調悪化したらどうするんだ
よダアホ。」
と悪態によって遮られた。

「早退させた方が良いツスカね？」
「あーそうだけど、黒子の体調しだいじゃないか？」ガリガリ、と
頭を掻くキャプテンの瞳には苛つきがにじんでいる。

「ったく、役に立たない一年が多いつてのに。有望なお前ら二人が
便りなんだぞ？おーい、聞いてんのかボンクラ一年ども！！こつち
を気にしてないでさっさと練習しろ！！」

うえーい、と何だか心底つらそうな声と共に
駄目でしょキャプテン！！本音出したらいけないつて！！
やら、

あーあ、あれがなければいい人なんだけどなあ…二重人格って困る…
やらの声が黒子の耳に届く。

「……あれ、キャプテン、今クラッチタイムではないですよ？」
何か違和感を感じとり、黒子は問いかけた。

「は？何それ。」
問いかけられたキャプテンは、心底訳が分からない、という顔で此
方を見ている。

「あーやつぱり頭打つたる。キャプテンは常時二重人格者の腹黒い……っげふっ」
先程の長身の男の腹にキャプテンの拳がめり込んだ。「お前それ以上言ったら容赦しねえぞボケ」
黒い笑みを浮かべて笑うキャプテンは、クラッチタイムの時そのままだと黒子は思い、首を傾げる。
「……すみません、っす」「分かれば良し、荻原はさっさと練習に戻れ」

聞き慣れない名前に眉を寄せ

「……おぎ、はら……？」
と呟くと

「うん？何だ？」
と長身の男が再び黒子を覗き込んだ。

「……」
ぱちくり、と目を瞬かせる黒子に不信感を得たのか、

「んーやつぱり保健室にいった方が良かったか」
ともう一度キャプテンに提案する。

「アホ、今日は保健の先生休みだつての」
ああ、もうだから臨時教員は役にたたねえ！！と眉間に皺を寄せるキャプテンは、正直言つて怖かった。

「あちゃー、黒子もう少して部活終わるからさ、待つとけるか？送つてやつから、さ。」

黒子から離れ、コキコキと肩を鳴らす荻原と呼ばれた男から、劣る言葉が発せられる。

「あーやさしいなあ、荻原」

「茶化さないで下さいよ、キャプテン。相棒としての勤めツス」
至極真面目に答えた荻原に

「ふはっ、本当にお前らつて良い相棒同士だよな」とキャプテンは目尻に涙を浮かべて笑った。

なにを

何を、言っている？

僕の相棒は…

「ほら、荻原もさつさと練習帰るぞ！！ほら一年ども！！何もたもたしてる！！有難い先輩達の助言を素直に聞けえ！！」

キャプテンの声が体育館中にこだまする共に二人は黒子から離れていった。

33

そんな二人をただ、呆然の眺める黒子は「……訳が分からない」と呟きはちり、と瞬きをする。

荻原？誰だそれは。

僕の相棒はただ一人なのに。

キャプテンも何を言っている？

ふつつつと沸いてくる疑問は途絶えない。堪らなくなり、上体を起こす。一瞬くらり、と目眩がしたが頭をふって誤魔化した。

目の前にあるのは、見慣れた光景だった。

単なる何時もの練習風景。そう、何一つ変わらない日常に組み込まれた光景。

ただそこに溢れる人間を除いて。

部活メンバー全員、知っている顔ではなかった。

キャプテンは勿論見知った顔だが、何か違う。

誰かが“柏木”と呼んだ途端に振り返ったのはキャプテンだ。キャプテンの名字は“日向”だと言うのに。

それに、もう一つ違和感。いつも彼の隣にいる女性。そして、以前にも僕が倒れたときに側に居て心配してくれた人がいない。

「……カントク…？」

何時も聞こえる元気な高い声はせずに、キャプテンの低い声だけが体育館内に響き渡る。

そして、一番の違和感は、あの赤髪がないこと。

彼は群衆に紛れようと頭一つ突き抜けた長身と派手な赤髪ですぐ分かると言うのに。

彼は、いない。

代わりに見えたのはあの荻原と呼ばれた長身の男だけ。

「か、」

彼の名を呼ぼうとしたが、一瞬間後に口を閉じる。

呼んで、居なかったら。

僕はどうすればいい？

居なかったら…

そんなこと、耐えきれぬだろうか。

何も分からなくなって始めて黒子は理解をした。

この世界はおかしいと。

今、目に映った世界が夢だとは到底思えない。

こんなにも現実帯びた夢があるはずがない。

もう一度、部活風景を見つめる。

汗を垂らし、生き生きとした表情で楽しげにバスケットをする彼らが夢の住人であるはずがない。

今を生きている彼らが、幻なんてあり得ない。

それだけは確信できた。

そうして、もう一つの確信は、僕が“黒子”であり、“バスケットをしている”こと。

… たった、それだけ。

たったそれだけなのだ。

そう、自分を確かめる術を今の黒子には持ち合わせていなかった。

何故ならば、彼が居ないから。

自分を“影”と称し、彼を“光”と称した黒子には、何がなんでも“光”が必要だった。

“影”“光”と有象物質に当てはめあやふやな自分を形にしてきた黒子にとって、欠いてはならぬ存在の“光”。

それが、今居ない。

見知らぬ部員達が黒子を心配げに見つめ、或いは無関心に練習に勤しんでいる。

この部員達が見知った部員であろうがなかるうが黒子にはなんの大きな差もなかった。

“光” がない

黒子にとってはそれだけが大事でそれ以上のものなど存在しない。

『本当にお前らって良い相棒同士だよな』
キャプテンの声が響く。

その時に見た、相棒と呼ばれた“荻原”という男は笑っていた。
仕方なさそうに、それでもすこし嬉しそうに。

それを思い出した黒子は、ダァン、と床を拳で叩く。

「相棒?.....」

僕の相棒は、彼だけだ。

『.....相棒としての勤めツス』

君じゃない。

渦巻いた感情は、苛立ちだけではないはずだ。
この感情、は。

「待てよ、黒子お前どうしたんだよ!!」

荻原と呼ばれた男の声がすぐ後ろからして、さらに走るスピードを上げた。

今、僕を動かしている感情は、何だろう。

あの部活が終わるまで、何の思考もせずになんぼんやりと寝転がって体育館の天井の骨組みを眺めていた。

嫌に、冷静だった。

自分がおかしくなったとは決して有り得ないとは言えないが、“光”の存在の記憶が、それを否定した。

ならば、おかしくなったのは世界の方だ。

何の疑いもせずとその結論に至った時は流石に肝が冷える感覚を味った。

それは、“光”がないから、直ぐに受け入れた事実。

そう、例えば他の部活メンバーが見知らぬ誰かになるうが“光”と“バスケット”さえあれば黒子にとっては世界がおかしくなってもどうでもいいのだ。

“黒子テツヤ” “光と称した者” “バスケット” さえあれば、“黒子テツヤの世界” は完成するのだ。

その、完成した世界が壊された。

余りにも理不尽でどうすることも出来ない力で、たった一瞬の間に、

こわされた

「黒子っ！！」

部活が終わり、帰り道までの間、冷静を装って静かにこの世界にいる“黒子”を演じたが、もう無理だ。
世界は、壊された。

“光”が再び居なくなった世界は、“影”なんて出来ない。

“光”があつてこそこの“影”なのだ。

“影”は、もういない。

帝光時代の全中が終わった後の気持ちに、今の気持ちは似ているだろうか？

何かを喪失したような悲しい気持ち、苛立ちを隠せずに握りしめた拳に食い込む爪の痛さ。

完成した世界がこんなにも脆かったのか、と嘆いた自分。

ぐいっと、腕を捕まれ荻原の方へ引き寄せられる。

「何ですか…離してくださいっ」

普段は絶対に出さないような張り裂ける声で拒絶する黒子に、荻原は困惑しながらも黒子を落ち着かせようとする。

「黒子、いいから落ち着けて。どうしたんだよお前らしくないぜ？」

「お前らしいって何ですか、僕は君の知っている“黒子”ではないのに」そう、誰にとっても“今此処に存在する黒子”を知っているものは居ない。

完成していた世界を壊された“黒子”を、知るものはいないのだ。

「……………えーと、……………やっぱり頭打った？それとも冗談かよ？」いや、冗談はないよな、お前冗談嫌いだし、とぶつぶつ呟く荻原を強く睨み付け

「僕は、君の相棒ではありません。君の“影”なんかじゃありません」
ん
と言いつつ。

「影…？月、じゃなくて？」
「つかなんだよ相棒じゃないって、何！？新手的からかい！？勘弁してくれよ、あー、と荻原は腕を掲げて大袈裟にうんざりしたの
を表した。

「お前さ、あの時いったじゃん、俺を見下ろして笑いながら」

「……………」

```
>div style="text-align:center"
align="center"<
```

ボクは月（脇役）

キミは太陽（主役）

ボク
月は独りじゃ輝けない…

けど太陽キミがいれば夜を照らすことができる

アシスト
月で輝くにしる
シュート
太陽で輝くにしる

勝利を照らそうとするのは一緒です>/div<

「とかさ、あの時は何言ってたかこいつとか、恥ずかしいこと抜かす奴だと思ってたけど…俺はう」

パシッ、と荻原が掴んだ手を振りほどき言葉を遮る。

「言わないで下さい、僕に言ってもその言葉は何の意味も持ちません。“光”が居ない“影”に何を言ったって、只の虚像に話しかけると同じ行為です」

辛辣に、しかし淡々と訳の分からないことを言い放つ黒子の雰囲気は一瞬荻原は飲まれかけたが、

「……………おれ、は！！嬉しかった！！」
と先程遮られた言葉を大声で叫んだ。

「だからさ、あんまりからかって変なこと言うなよ。お前ってどこか無意識に人の神経逆撫ですること平気で言うしな。なんかいつも人を試している雰囲気かもしだしてるけどさ、今回の発言は許さねえぞ？」

俺は、お前のこと信頼してんだ。

それを壊そうとすることを何故平気にしようとしているんだ、と真剣に訴えかける荻原の瞳に黒子が映る。

その、真剣な瞳に、彼が重なる。

「……か、神君……」

「え？」

何を言っているんだ、自分は。

ああ、話の噛み合わない水掛け論を繰り返したところでこの人が引いてくれるはずもない。

再び、激情する気持ちを思考をもって押さえつけた黒子は

「いえ、すみません、体調が悪かっただけです。変なことってすみませんでした」

とあしらうように言う。

それに気づかない荻原は

「……ならいいけど。後その他人行儀な丁寧語使うの止めな、いつもため口だろ」

あれ、これもふざけてんの？と笑った。

その笑顔に、一瞬の苛つきを覚えたのは気のせいではない。

火神君は、あんな風に笑ってくれたことなんてないのに。

馬鹿げた思考が頭を支配する前に

「送ってくれてありがとうございます
と頭を軽く下げる。」

「……元気出せよ」
まあ、あんだけ走れるなら大丈夫か、と言いながら、ぱんっ、と荻原に肩を叩かれよろめいた。

「…はい」
か細い声で返す黒子に荻原は苦笑いをし、
「じゃあなー黒子！！また！！
と元気良く手を振り帰っていった。」

「……気をつけて」
小さく、手をふりかえした黒子に再び陰鬱な思考がよぎる。

「ここは、何処だ？」
目の前の標札は“黒子”とかかかっている。
確かにこれは自分の家だ。だけど、この違和感は何だろうか。
やはり、此処は僕の知っている世界ではない。

無性に心細さが心を支配し、胸を締め付ける。
ぎゅっ、と制服を掴む。

「……か」

“ 火神君 ”

そう言おうとした自分が余りにも情けなくてさらに力をこめて握りしめる。

本当に、なんて執着心の強いことだろうか。

家の外灯がパチパチと付く。

夜遅い自分と父親を向かい入れるために母がいつも電灯着けて待っていてくれた。

その光に、僅かな暖かみを覚え安堵し掴んでいた手を緩めた。

足元を見ると影が出来ている。

「本当に、“光”がないと“影”は出来ないんですね……」

ぼつり、と呟く黒子の口元は僅かに上がり、無表情とは程遠い顔で自虐的に歪ませる。

ああ、この気持ちは。

苛つきでも、恐ろしさでも、悲しさでも、寂しさでもない、これの気持ちは。

悔しさ、だ。

僕の完成した世界を壊された、悔しさ。

そう理解すると、すどん、と先程までの笑みは抜け落ち無表情が顔を覆う。

辺りは、既に暗闇だ。

逢魔時は遠に過ぎた。

きっと、僕は魔物に会ってしまったのかも、と非現実な思考を持ちながら、「ただいま」の言葉も言わずに家に入りドアを閉めた。

Monday

壊された完成世界

type:01-b | sun&shadow

.
. .
t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

壊された完成世界 (sun & amp; shadow) (後書き)

えっと、この長さは何ですか？

いえ、私は長く書く方が好きなのでいいのですが、これ携帯サイト(管理人は携帯サイトは短い文章だと思い込んでいる)の文章の長さを遠に通り越してるよ!! (*、´、何

今回、連載の黒子は読み切りの黒子と対比としてなるべく冷静に行動をして貰いました。

いえ、こだわりを持っていてところは混乱して貰いましたが、読み切り黒子は一人で教室にいて火神に出会ったので、状況判断が出来ずに混乱したように書きました。

連載黒子は、部活のメンバーの様変わりを目にして、更に火神がいないと分かったことで混乱しつつも冷静に思考を練り広げるようにさせました。

さてはて、二人はどうなるやら… (´、*)

取り敢えず荻原は火神よりも良い人めに書きました。読み切りを見るに火神みたいに擦れているところが無かったので

だって黒子の事を馬鹿にして見下してたのに、黒子の力を目の辺りにして、黒子を認めたとたん自分の非を認めて土下座して謝ったあの意味良い奴だもん。

(あ、なんだか主従関係の出来上がり…? 主〃黒子、従〃荻原)

取り敢えずプロローグを書いてなかったから無理やり書くことと思う。なに、洒落にならない怖い話スレまとめの異次元、時空のおっさん関連読んで色々ヒントを得たから軽くかけるさ

0
9
0
7
2
6

知り得なかった回答) Light & amp; moon (前書き)

火神(連載)と黒子(読み切り)の火曜日のお話です。

知り得なかった回答 (Light & amp; moon)

Tuesday

02 - a . (Light & amp; moon)

遮光カーテンから漏れる朝日の光が網膜を焼き付ける。

夢うつつにベッドの中でまどろむとサイドテーブルに置いている目
覚まし時計からけたたましい音が響き渡る。

p i p i p i p i p i p i p i

一気に、現実に取り戻され布団をはね上げる。

なんだか、体が痛い。

ギシギシと痛む足や肩を振り回しながら、ベットから立ち上がり伸
びをする。

はて、何故こんなにも足腰肩が痛いんだろうか。

昨日の部活練習でそんなにも激しく動いた覚えは無い。

：いや、昨日の部活に自分は出たのだろうか？

頭を右手で押さえ考え込む。

つきり、と頭痛がした気がした。

昨日の記憶があやふやだ。不意に部屋を見渡すと僅かな違和感を感
じる。

自分の部屋ではない、と言う奇妙な感覚に捕らわれ、もう一度頭をふった。

「まあ、いいか」

寝起きの頭で深く考えるのは止めにしよう。

正常に頭が回り始めるのは起きてから三時間以上と言われている。大人しく支度を終えて学校へ向かおう。

ぎっ、と軋む体にもう一つ伸びをして黒子は階段を降りていった。

朝練に向かう道のりは、何時も静かで心地が良い。

この静かな時間を自分だけが占領出来る喜びに軽く足を踏み鳴らしながら歩いていく。

サワサワ揺れる青々とした木々。

梅雨が明けたのにも関わらず、猛暑が近づかず心地よく過ごしやすい気候が続いている。

今年はエルニーニョ現象のせいで気候が変則的だと朝のニュースキヤスターが言っていたな、と黒子は欠伸を噛み殺す。

涼しい風が薄い髪をなびかせる。

「…荻原君、もう朝練してるかな」

いつも朝練に行くと必ず彼の姿があった。

正門から臨むグラウンドに設置された移動式のゴール。それに目掛けて駆けていく金髪の男子を部屋に向かいながら眺めるのが黒子のお気に入りになっていた。

「…で、その荻原って誰だよ」

ガシツと頭を捕まれドスの聞いた声が後ろからする。

「へえっ!？」

すつとんきょうな声を出して驚くと後ろの人物が驚くのを感じた。

「…っ変な声出すなよ馬鹿野郎」

「っな、な…何」

ぱくぱくと口を開いたり閉じたりする黒子をじいつと睨み付ける赤髪（あかみげ）の男こと火神。

「お前、昨日の奇妙な行動はなんだよ!? お陰で練習は上手くないわカントクから鉄拳を喰らうわキャプテンの機嫌は悪いわで大変だったんだぞ!? 弁解はあるか!？」

「弁解も何も…君は…」

つきり、と痛む頭を黒子は右手で押さえる。

持ち越した問題が荒波を伴って迫ってくる感覚に、頭が割れんばかりの痛みがする。

朝起きたときの違和感。

足腰の痛み。

昨日のあやふやな記憶。

ザアアアアア…

涼しい風が、辺り一面に吹き荒れると共に、黒子は目を見開いた。

「あ……」

自分が喪失したものが何かをこの時になってようやく思い出す。

「黒子…?」

火神の声を無視して黒子は学校に向かって走り出した。

忘れていた訳じゃない。

ただ、信じたくなかった。

自分の大切な人がいない、それだけでこんなにも心が乱された自分が情けなかった。

走る、ただひたすらに走る。朝の清らかな空気がねっとりとした陰惨な空気に変わり黒子にまわりつくようだ。

やっとの事で正門にたどり「荻原君！」と力の限り叫ぶ。

朝練に来ている回りの部員が何事かと振り向くが気にしない。

そろり、と俯いていた頭をあげ、返事が帰ってこない校庭を見つめる。

自分の望む金髪の男子の姿は、無かった。

息が上がるのを感じ、口許に手を当てる。足腰、全身が軋み痛みを発した。

正門から校舎に伸びる道なりにある木に手をつき、踏ん張るがずり、と力が抜けその場にへたり込もうとした。

「黒子」

ぐいっと、黒子の腕を掴み支える男子を見上げる。

瞳に映るのは赤色の瞳に髪。

その瞳に怒りと自分に対する気遣いを感じた。

朝の空気がやけに冷たく感じた。

「…」

「<…」

「黒子!!」

ハツと意識を戻すと目の前に現れたのは先程の赤髪の男子。
確か名前は…

「…?」

やはり、分からない。

ボクは目の前の男子の名前を知らない。

「お前さ、ぼうつとし過ぎ。何、一限目からの教科書開いたまんまにしてんだよ。もう昼休みだぞ?」

その言葉を聞いて辺りを見渡す。

朝から今までの記憶が抜けていると同時に自分の今いる場所がわからなくなっていた。

直ぐ様今の情報だけでも得ようと目玉が世話しなく動く。

12:45を指す時計。

ざわめく室内。

弁当を広げ、和気あいあいと和やかな雰囲気醸し出す昼下がりの午後。

「…へ」

「いや、へ?じゃねえよアホ」

ぐりぐり、と頭に手を載せて黒子の髪を掻き回す掌。「…痛い」

無遠慮に掻き回す掌の主に文句を言うと

「痛くしてんだよ」

とどうしようもない答えが帰ってきた。

「…君、誰」

もう一度、昨日答えを得なかった疑問を相手にぶつける。

「はあ?だからふざけんなって昨日から言っ…」

「お願いだから、真面目に答えて。君は誰。」

男子をじっと見つめいい放つ。

「…黒子?」

異様な雰囲気を感じたのか、男子の表情が揺らいだ。

それでも見据え続ける黒子の淡い瞳。

幾ばくかの沈黙の後やっと

「…屋上、いくぞ」

と赤髪の男子が口を開いた。

「話を荆らさないで」

「いいから、此处で話す話しじゃないだろ、早く来い」

ガタンツと席を立ち多量の食パンを抱えた男子が此方を振り返る。

その異様な気迫に根負けした黒子は…分かった、と呟いて教室を後にした。

「ああ、そつだ。ほれっ」廊下を歩いている途中で赤髪の男子が此方を振り向き何か投げてきた。

慌てて受け取った物を見ると多量にある食パンの中の一つだと分かった。

「…何、サンドイッチ？」

「寝ぼけて購買に行っていないだろ、俺は沢山あるからやるわ」
足りないか？と少し不機嫌そうに言う男子の心遣いが、妙に心に染みる。

「いや…ありがとう」

昨日の今日で、まだ怖い印象があったが、少しだけ、この男子に対して心を許すのを黒子は感じた。

「んで？真面目な話、お前さ昨日から変だ」

どうしたか言ってみろよ。柵にもたれ掛かって言う火神のふてぶてしい態度に少し呆れが入った声で黒子は

「…先に名前を教えてよ」と言った。

「名前は後。事情を聞いた後に教えてやつから。…教えるも何もねえけど。」

たく、何がなにやら…とブツブツ呟く赤髪の男子を尻目に

「…分かったよ」

と返して言葉を繋いだ。

まず、ボクは君を知らない。

ボクは黒子テツヤだ。

だけど、君が知っている黒子ではない。

昨日、部活練習中に貧血かなにか起こしてボクは倒れた。その後目を覚ましたら教室に居たんだ。

端的に事情を述べると男子の瞳が見開いくのが分かった。

その瞳が怒りに染まるのは一瞬だった。

ガツと胸ぐらを捕まれ屋上の柵に押し付けられる。

柵を乗り越えた背中が風に煽られて気味が悪い。

「てめえっ…本気で言ってるのか!？」

「…そうだよ」

胸ぐらの手を外して欲しくて彼の手を引っ搔くが、更に力を込められて少し咳き込む。

「んな訳ねえだろ!？俺を忘れるなんて…!？」

悲痛、激怒、混乱、負の感情が何もかもがない交ぜになった瞳で、表情で言葉を吐き出す彼に何故か冷静になる自分を感じた。

目の前に居るのは、赤髪の男子ではなく、昨日の自分のような気がした。

「忘れてるんじゃない、知らないんだ、ボクは」
薄透明な水色の瞳が怒りに染まった赤色の瞳を射ぬく。

「君を、ボクは知らない」

自分にしては努めて冷静に、淡々とした口調で言つと男子はゆっくりと胸ぐらから手を離れた。

「…記憶、喪失とかか…？」

「違う。ただ、君を知らないだけであつてボクは今までの記憶があるよ。だから記憶喪失ではない」

あり得ない、記憶喪失なんて。生まれてこの方までしっかりと記憶はある。

「…冗談じゃないよな」

「君が知っている黒子は、冗談が好きだったの？」

「大嫌いだった」

直ぐ様断言する男子の瞳に嘘はない。

「うん、ボクも冗談は嫌いだよ。だから、今ボクが話していることは信憑性があるはずだよ。」

口許に笑みを浮かべると再び苛ついたように赤髪の男子の眉間に皺がよつた。

「…じゃあ、お前は何者なんだよ」

「ボクは、黒子テツヤ。それだけだよ。」

敢えて言うなら太陽をサポートする月、だね。

ちらり、とその言葉に太陽を見上げる。

今日は晴天、雲の一欠片もなく青々とした空に太陽が広がっている。

「その太陽つてのが…おぎ…ええと」

「荻原君の事？」

「そいつの事か」

「うん、太陽が荻原君で月がボク。」

再び思い出したように笑みを向ける。

「…君が知っている、黒子は何て言っていたの？」

今度は何の反応も返つてこなかった。

「……」
ただ無言を突き通す男子にねえ、と問いかける。
「俺が…光で自分が影だと…言っていた」

太陽と月

光と影

似て非なる、例え。

「へえ、何となく似てるね。でも違う。ボクは君の影なんかじゃないし君はボクにとっての光でも何でもない。」
突き放す、とはこの事か。ボクにとっての相棒は荻原君であって君では無い。
それだけは、絶対に理解して貰わなければならなかった。

自分はこの男子が知る黒子ではないんだから。

「くそっ…!!」
ガイイン、と柵が余韻を残して震える。
その赤い瞳に表情に傷ついた心が見えたのは、気のせいではない筈だ。

一向に要領を得ない話の一つ自分の仮説を述べてみることにする。
仮説、と言っても余りに突飛でおとぎ話のような話だけど、自分はこれで納得している。
後は彼に納得して貰うしかない。

ボクが君の影ではないと言うことを。

「…これは、夢物語として聞いてね。君も聞いたこと、あるんじゃないかな」

「…何を…」

SF小説に多く使われている題材なんだけどね、と付け加えて言葉に出す。

「パラレルワールド、平行世界の話」

ボクにとつて、これが一番近い気がするんだ。変な話だけど。

そう言うつと男子がすかさず突っ込む。

「小説の話をしてるんじゃないやねぞ、おい」

「だから話半分聞いてつてば」

人生の分岐点に立った時人はどちらかをもしくは多数にある選択肢を選ばなければならない。

その時点では同じであった筈の世界が一方をあるいは他方を選んだ事によって違う世界に分岐する。

その二つの世界は分岐した後はお互いに干渉しあわないので、そういう平行世界の存在のあるなしを感知することはできない。ないと考えても間違いではないし、あると考えてもそれを証明することはできない。

「此処までは分かる？」

そう言つて黒子は人差し指を立てて回す仕草をする。

「…さっぱり」

返ってきた返答に

「ああもつ、もどかしいな。君はちゃんと小説とか読んでる？」
と不満をもらす。

そして、頭の中でもう一度話を組み立て直す。彼に理解が出来るように。

例えばの話だよ？

僕が高校を選ぶときにA、B、C校があったとする。ボクはA校を

選ぶ可能性もあるし、同様にB、C校を選ぶ可能性もあるってこと。仮にこの高校をAとして、ボクはAを選んだ。けどもしかしたらBを選んだボクも要るかもしれないし、Cを選んだボクもいるかもしれない。この場合、3つの可能性は独立した存在にある。

Aを選んだボクはこの世界にいて、B、Cを選んだボクはまた違う世界にある。『似て非なる世界』と言うのが、『平行世界』って言う。

「分かった？」

「さらに訳が分からなくなった…」

目を白黒させて油汗をたらず彼は何にも分かってないようだった。どうしたものかな、と眉を潜めて考える。

自分が言っていることは小説でのSFの知識が無いといまいち理解しづらい話だ。

なら、いつその事視点を変えて話して見ることにする。「君がこの高校を選ばなかった場合、どうなる？」

んーと考えこむ男子の言葉を待つと

「黒子：に会えなかった事になる…な」

と自信なさげな声が返ってきた。

「その場合、君は黒子の存在を知っている？」

「知る筈ねえだろ、会ってないから…あ」

やっと、望む理解にたどり着いた彼を見て黒子は少し安堵の表情を浮かべる。

「ね、分かった？僕の置かれている状況がこれに似ているってこと。僕は君を知らない。ましてや昨日会ったキャプテンも知らない。」
だとしたら、僕は知らない世界へ来てしまった、と言うのが妥当かな？そう言つと火神は眉間の皺をさらに寄せて

「いや、だからってそんな…有り得ねえよそんな話」と弱々しく否定する。

「うん、ボクもあり得ないって信じたい。だけど今のボクの状況は

これに酷く近いんだ。だから、君の事をボクは知らない。」

「…マジかよ」

呆然とした顔で此方を向く彼に

「マジ」

と返す。

この時、自分がどんな表情をしていたかは知らないが、多分神妙な顔をしていたんだと思う。

さて、話が一段落ついた、とビリリツとサンドイッチの封を開ける。

「…お前は、これからどうするんだよ」

「さあ…どうするもこうするも原因は分からないし。どうする事もできない。ただ自分が置かれている状態を受け入れるしかない。」
はむっ、と口に含むと辛子マヨネーズの辛味が舌を刺激する。

ああ、やはりこれは現実か、とどこか悲しい気分でサンドイッチを味わう。

「…なんでそんなに冷静なんだよ、お前」

「冷静に見える？内心はぐちゃぐちゃでどうしようもなくなってるよ」

現に、朝のボクは外面からして混乱しっぱなしだったけど。

「何か、他人事みたいだな」

「んー？…荻原君が居ないのはもう分かったし。だったら次はどうしかして一番近い君に理解をして貰うのが先かな、って思ったから…」

これでも色んな所に矛盾やらがあって混乱してるんだけど…やっぱり僕の感情表現って分かりにくい？そう黒子が聞いても男子は答えず押し黙ったままだった。

「本当に、俺の事を知らないんだな」

「うん、知らない」

「俺の知っている黒子じゃ無いんだな」

「そつだよ」

冗談は嫌いって言ったよね。ともう一度念を押す黒子を一瞥しながら火神は言葉をつむぎだす。

「お前はこの状況を受け入れるしかないって言ったな」

「うん」

不意に火神は真つ直ぐに黒子を見据え問いかける。

「…それでいいのかよ、お前は…！？」

「いい筈無い」

間髪たたずに発せられた言葉はただ不安に揺れていた。

「ボクは萩原君が必要だった、一緒に勝利を約束したのに…こんな訳の分からないことになってしまったんだ」

いい筈無い、よ…火神の視線から逃れ俯く黒子。

それは、迷子さながらの姿であった。

「…俺から見て、お前が冗談言ってるとも気が狂ってるとも思えない。仮にも…お前は黒子だ。それは俺が…一番分かってる。」

だって、あんなに真つ直ぐな瞳で自分を見据える黒子の何処に歪みが存在するのだろうか。あり得ない。

「……」

「お前は、どうしたいんだ」

「…たい」

黒子は俯いていた顔を上げ、もう一度火神を見据える。

「帰りたい、だけど方法はない。だから。」

ここでしばらくこの世界の黒子で居るしかない。

だから。

「…教えてよ。君の名前。そして…君が知ってる黒子の事。」

そう言った黒子の瞳は強い意志と…幾ばくかの不安を含んでいた。
火神はゆっくりと息を吐き出しコンクリートの床に座り込んだ。

「…さぼりだな、こりゃ」

キンコンカンコン…

五限目を告げる鐘がスピーカーから鳴り響くのを背に火神はうんざりしたかのように呟いた。

Tuesday

知り得なかった回答

type:02-align:right&pp:moon

...to be continued

0
9
0
9
0
4

それは僅かな違和感 (sun & amp; shadow) (前書き)

荻原 (読み切り) と黒子 (連載) の火曜日のお話です。

それは僅かな違和感(sun&shadow)

Tuesday

02-b.(sun&shadow)

只今絶賛立て籠り中。

．．．．なんて言ったらどんな顔をするのだろうか、と横に居る金髪男子を尻目に黒子は溜め息を吐いた。

昨日の今日で学校を休みたかったが、母はそれを許してはくれなかった。

飯病なんて使う暇があるならさっさと支度しなさいね、とあっさり返され今に至る。どうやら両親には相違は無く、確かに自分の父母であり安心する。

自分のルーツとなるべき人間が違っていたらどうしようかと思っていた。

だとしたら、この世界は僕がどこかで分かれた選択肢の内の一つか。昨夜家に帰って何気なく開いた卒業アルバム。

照栄中学卒業アルバム、と側面に書いてあるのを見るとどうやら中学は違っていたみたいだ。

そう言えばキセキの世代はあったのかな？と今さらながら思う。

昨日は自暴自棄も良いところで、ただ闇雲に走った体が重く、睡魔に襲われ寝入ってしまった。

つまり、何の対策も成さぬままに再びこの場所、誠凛高校に足を踏み入れたことになる。

自分が自暴自棄になった時の愚かさは全中の後の行動で嫌と言うほど知っていたが、今回も愚かさが出てしまったようだ。

つまり、逃げる。

それだけのこと。

現実逃避も甚だしいが、何の対策も心構えも無しに昨日の男子、荻原やバスケット部に顔を出すなんてとんでもない。

いくら自分が冷静を保った所でどうにもなら無い、いや昨日の様に崩れてしまいかもしれない。

それだけは嫌だった。

しかし、一度は教室に踏み込まなければならぬ。

もしかしたら、全部夢だったのかもしれない。

そんな淡い希望が黒子にはあった。

そろり、と存在を消して1-Bの教室をのぞきこむ。

「……」

自分の席の前は空いており、誰がその席に居るのか分からなかった。まだ、朝練は終わってないのだろうか。

さぼった身で考える。

座席表を確認すればいいか、と教卓側へ回り込もうとしたとき、

「黒子!!はよ!!!」

と元気な声が廊下に響いた。

振り返る必要なんてない。もう声だけでその人物が誰なのか分かった黒子は直ぐ様駆け出し教室を後にする。

流れていく視界に窓ガラスに反射した自分が映る。余りにも情けない姿に小さく溜め息をついた。

「…何をやってるんでしよう、僕は」

此処に来てから狂いまくりの自我に呆れ果てながらたどり着いた場所のプレートに書かれた“図書室”という文字を見上げて扉を開いた瞬間、古びた本の匂いが鼻孔をくすぐり安心を得る。

「…やっぱり此処は落ち着きますね…」

何かしらの考えがまとまるまで、せめて自分を取り戻せるまで此処に居よう、そう決めて黒子は一番端の陽当たりの良い場所を陣取り、座り込む。

先生が来たところで僕に気づくはずはないと、多大なる自信を持っている黒子だからこそ出来る所業だ。

「…さて、何から考えましょうか…」

夢ではないと分かった以上、自分の置かれている状況は昨日の次点で理解している。

家に帰りついた時は小説の読みすぎのせいで何か幻想でも見ているのか、とも自分の思考を疑った。

しかし、自分の部屋に入り…自分といっても何処か他人のような気がして躊躇はしたが、部屋を見渡し少しあさった。

主にアルバム類や本棚だが、自分の部屋には無いものが出てきて、ああやはりこれは現実か、と思考が冷めたのを感じた。

特に、写真に写る自分の表情は比較的穏やかだ。

何だろうか、穏やかな笑みとは少し違う余裕を持った笑み。

僕ならば絶対に出し得ない表情だ。

自分で言うのもなんだが、基本的に無表情だから。

その次点で昨日は考えることを諦め、不覚にも寝入ってしまった。

ぐしゃぐしゃと自分の頭を搔く。冷静を保ちたい自分と喚き叫びたい自分が交互に胸に浮上ってきて気持ちが悪い。

だが、昨日程の絶望感に押し潰されたって仕方がない。

ここで、諦めてしまう癖を絶たねば。諦めたって希望を持ったって何をしたってしょうがない。此処には、彼は居ない。それだけが事実なのだから。

そう考えると悔しさが再び胸に浮上ってきて、胸を掻き乱す。

壊された、理不尽な力で僕の世界は壊された

机に突つ伏し、くしゃり、と髪を搔く。
悔しさが悲しさに変わる瞬間、黒子は再び意識を手放した。

「火神君」

何を見てるんですか？そう隣で問いかけると

「うつわぁぁ…」

と何だか情けない声と共に幽霊でも見てしまったような表情で此方を振り向いてきた。

「お、まえ何時からそこに…!!」

何時もの反応に内心苦笑いをしつつ、表面は淡々とした表情で

「さつきから居ましたよ。何時気づくかな、と思いましたが」と若干からかうつもりで言葉を返す。

「何時気づくも何もあるかぁ!!てめえの存在感の薄さに何時もびびらせる此方の身にもなれ!!」

めっちゃ怖いんだぞ!？分かってんのか!？と捲し立てられ僕は少し不機嫌になった。

「存在感薄いつて…分かっていることを繰り返さないで下さいよ。」
ちよつと試してみたただけなんです、怒らないで下さいよ、と言つと
火神は面食らつたように眉を潜めた。

「あ、いや…」

少し、微妙な雰囲気の流れる。

ただ、僕は試してみたかっただけ。

火神君がどれ程僕の存在を認めてくれているか…試してみたかっただけののに。

…期待なんてするつもりは無かったが、彼の反応に若干の苛つきが胸に去来し少しむしゃくしゃした。

「…夏祭り、のポスターを見ていたんだよ」

話を換えようとし、火神がポスターを指差す。まだ苛つきが残っていたが、此処で喧嘩しても仕方がないと火神の話に乗る。

「…そう言えば、夏休みも直ぐそこまで来てますね。」

…部活練習に必死で気づきませんでした、そう言つと火神はがりがり頭を掻き小さくため息をついた。

「…行くか？」

「…はい？」

「だから、夏休みに行くかつて聞いてんの」

豆鉄砲を食らった顔、そんな顔を僕はしてしまったのだろう。火神君は僕の顔を見て、ぷはっ、と吹き出した。

「…何、笑っているんですか」

「いや、お前もそんな顔が出来るんだなって」

くくく、と笑いを噛み殺そうとする火神を尻目に少し眉を寄せる。

耳に熱が集まった気がしたが、髪に隠れていると思ひ込んでおこう。

「行きますよ」

「あ、そうか。なら一緒に行こうぜ、部活終わった後だから暇だろ？」

俺さ、何年間も夏祭りに行つてなかったんだよ。久しぶりに行き来、と言つた彼に首を傾げる。

「…なんで僕と？」

火神と仲いい人なんて沢山いるでしょう？そう疑問に思い問いかける。事実、僕達はクラスと部活が一緒なだけであつて。部活では“相棒”として接しているが、一番仲が良い親友だなんて絶対に言い切れない、何処か中途半端な仲だ。

クラスでだって席が近いだけで火神君は大半の時間を他のクラスメイトと戯れている。

“相棒”としては、かけがえのない大切な存在だけど、“友達”としてはじっくりこない仲なのに。

「…理由なんて必要か」
思いがけない切り返しに再び目を見開く。

「誰彼とつるむのは俺の勝手だろ？そこに理由なんてねえよ、つるみたいからつるんです。なんでお前時だけつるむのに理由なんて必要になるんだ。」

そうだろ？と不思議そうに返す火神に対して不思議と暖かい気持ちが生まれる。

先程の苛つきは、もう何処かに消し飛んでしまった。

「…そうですね…」
僅かに微笑む黒子に満足したのか、火神は黒子の頭に手を載せぐりぐりと掻き回す。

「よっしゃ、決まりな。」

その声を聞きながら、嗚呼、この人は僕が隣に居ることを許してくれているんだ、と思い掻き回す手のひらの暖かさにこそばったくなつた。

「…ん」

「あ、やっと起きたな黒子。大丈夫か？」

隣で響く声に自分の心が嫌悪感を示すのを感じた。

驚き、ガタンツと音を立てて跳ね起きる。金髪の髪の子を見下ろ

すと笑顔で

「はよ、よく寝てたな」

と言った。

つて言つてももう昼休みだけだな、と何処か呆れたように笑う。

「お…ぎはら、君」

ん、何？と此方を向いた所を見ると名前はこれで合っているようだ、と安堵の息を吐く。

「お前さ、朝すっごい速さで逃げていったろ。吃驚したわ」

バスケの時もあの速さで頑張れよーと笑う彼を尻目にストン、と椅子に座り直した。

「…気分、どうだ？昨日から調子悪そうだったし…」

頭を強く打ったもんな、病院行った方が良かったか？心配げに頭を触ろうとする荻原の手をパシッと払い除けた。

「…黒子？」

眉を潜めて此方を見つめる視線に居心地が悪くなる。寝ている間に見た夢が、一層黒子の心を掻き乱していた。それが更に気味が悪いほどの苛つきと嫌悪感を引き出す。

ここで、この荻原と馴れ合う事は到底今の黒子には無理だった。

しかし、荻原はそんな事を知る由もない。ただ彼は友達を心配しているだけに過ぎないのだ。

荻原を知らない黒子にそんなことをしても仕方がないと言うのに。

「すみません」

ただ、それだけ言つて席を立ち歩き出す。

…そう言えば、彼は探してくれたから此処に居るのかと思ひ立つ。

この世界の黒子は余程荻原と仲が良いのか、と一人訳の分からない苛つきに捕らわれた。

「待てよ」

「待ちません」

「何怒ってるんだ」

「怒ってなんていません」

「嘘つけ、表情に出まくり」

彼の言葉に驚き立ち止まる。

「表情に…出てますか」

「出まくり」

「何に対して怒ってるんだよ、言ってみてくれよ」

そう言う荻原の瞳は、真摯だった。

僕は、そんな瞳を知らない。

「…俺に怒ってるのか」

一瞬、何を言われたのか分からなくなる。

「え…」

「俺を見て逃げるわ不機嫌な声を出すわでさ、俺、お前に何かしたか？」

昨日から今日までの事、先程見た夢が脳内ではじけ飛ぶ。

目が覚めて見た光景。

火神君が居ないその風景。変わりにその位置におさまっていた荻原

という男。

親しげな振る舞い。

信頼した瞳。

夏祭りのポスター。

当たり前かのように誘われた時の嬉しさ。

こそばったかった手のひら。

嗚呼、そうか。

僕は。

「八つ当たりだ、単なる…」

唐突に分かってしまった気持ちに名前をつける。
八つ当たり、だなんて情けない名前に愕然とした。
光と影とバスケ。

その三つ、たった三つ、されど三つが揃った世界が、黒子の全てで、満足していた。

それを壊された状況の僕に笑いかけてくれる荻原と言う男。
この世界の黒子の相棒に収まっていた彼。

荻原は、さも当たり前のように僕を“相棒”と言って異質な僕をすんなりとこの世界に組み込ませた。
それが、どうしても許せなかった。
異質なら異質のまま居たかった。

それならば、僕はまだ“火神君の相棒”で居られたから。
なのに、荻原は当たり前のように“荻原の相棒”として接した。
それが悔しくて悔しくて…何も知らない荻原に八つ当たりをしてしまった。

「…八つ当たり？」

怪訝そうに問いかける荻原に瞳を向ける。

「すみません…」

謝罪を告げる自分の声が何処か遠くに聞こえる。

「八つ当たりをしてみました、すみません…君は、何も分からないのに一方的に怒ってしまっ

すみません、もう一度呟き踵を返す。

そのままスタスタと歩き出そうとすると腕が捕まれた。

「黒子、お前さ…」

ぼんやりと荻原が口を開くのを待つ。

彼が何を言うのか、その瞳を見てなんとなく分かってしまった。

「なんで、そんな無表情なんだよ」
おかしい、ともらす荻原に黒子はうつすらと笑みを作った。
口だけ持ち上げたそれは空虚な笑みだった。

「これが僕の普通ですよ」
ゆっくりと荻原の手を腕から離す。

「すみません、貴重な休み時間を潰させてしまって。今日は部活に出れますから：先に教室に戻っておきますね。」

歩き出した黒子の後に続く足音は無い。
安堵の息を吐き出しながら、図書室の扉をくぐり抜け、閉じる。

荻原の黒子を引き留めたときの瞳。

その瞳に写る感情は、信じた何かが喪失、もしくはひび割れてしま
う事に対する恐怖だった。

彼は、もしかしたら潜在的に分かってしまったのかも知れない。

僕が、“荻原の相棒の黒子”では無いことを。

しかし信じたくない気持ちの方が優先してそこにたどり着けない。
そんな、ぶれた心が露になっていた。

この時点で僕は決めた。

僕は、誰にも今陥った状況を話さないことを。

話たところで狂人扱いされるのが落ちだ、と言う考えも勿論ある。
しかし、それとは別に試してみたかった。

荻原が、この世界の黒子を何処まで理解し信頼していたのか。

それは、僕と火神君の信頼関係のようなものなのか、それとも以上
か以下か。

この世界の黒子と自分自身。

相違は必ずあるはずだ。

中学を離れた時点ですでに歩んだ道のりは違うものになっている。
必ず相違はある。

あのアルバム表情が表すように。

あの微笑みを浮かべ、ため口を発する黒子は、もはや自分では無い。
かと言つてこの世界の黒子になりきるつもりは毛頭ない。

僕は“火神君の相棒”なのだから。

このままの自分で日々を過ごす。

荻原が違和感を本格的に感じ、僕に言及するまでは何も言わずに荻原と接する事にしよう。

「…そうすれば、僕は“火神君の影”で居られる…」
その呟きにすがり付くような悲しみが含まれていたことを黒子は知らない。

さて、まずは手始めに授業に出るか、と黒子は教室に向かって歩き出した。

Tuesday

それは僅かな違和感

type:02-b | sun&shadow

.
. .
t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

それは僅かな違和感（sun & amp; shadow）（後書き）

読み切り黒子は、火神に「黒子は冗談が嫌いだ」という事を信じてもらっている事を前提に突飛な話、「平行世界」の話をしました。火神は、戸惑いながらも明らかに違う黒子の様子から判断して一時はその黒子の仮説を飲みます。…かと言って半信半疑だけど、「黒子は冗談が嫌い」を信じている分信憑性は高まっている。また対照的に連載黒子は何も言わない道を取りました。連載黒子と読切黒子の存在は「似て非なる者」なので同じにしてはつまらないので…

Mondayでの連載黒子と読切黒子対比は状況把握と対処の仕方Tuesdayではこれからの自分の在り方に対する対比を表しました。

あ、ちなみに黒子が見た夢は現実の回想です。

それだけ火神の存在が黒子にとって大きいと言う意味で書かせて頂きました。

連載は一話5000文字以上かつ五話以上を目標に掲げている人間です。

携帯サイトだからって短文は許さない！！

私は読みごたえのある内容がいいんだいっ（、、）

同一線上の邂逅 (Light & amp; moon) (前書き)

火神 (連載) と黒子 (読み切り) の水曜日のお話です。

同一線上の邂逅 (Light & amp; moon)

Wednesday

03 - a . (Light & amp; moon)

嫌に、足が重い。

火神はまだ薄暗い朝の道をひたすら歩いていた。うつすらと、霧が立ち込めて視界が明瞭としない。

それを断ち斬るように重い足を持ち上げ地面を踏みしめる。

確かめるために、火神は歩いてきた。まんじりとした気持ちが混ざり合い、明確な名前も与えられずにそれは胸の底に横たわっている。確かめなくては。

火神はそう呟いてひたすらに歩き続けた。

目を覚ます度、これは夢だ、と自分に言い聞かせる僕は愚かだと溜め息混じりに自嘲した。

そんな現実逃避、この扉を開ければ直ぐに打ち破られるのに。

「はよ」

玄関を開けてすぐに目に入った赤髪の男。名前は火神大我、アメリカからの帰国子女、黒子と同じ高校、同じクラス、同じ部活の……

言わば友達、仲間、相棒。

勿論“この世界の”という注約が前に付くが。

もう一度、瞳に目の前の男を映して確認する。現実逃避する自分に叱咤して、真っ直ぐに彼を見据えた。

「何、じろじろ見てんだよ、キモい」

後ずさつて顔をしかめ暴言を吐いた火神に黒子は溜め息を付くと「おはよう」とだけ返して火神の横をすり抜けた。

「っおい！黒子！」

叫ぶ火神を一瞥して黒子はゆっくりと口を開く。

「…残念だけど、やっぱり現実みたいだね」

「……その調子じゃまだ戻ってねーみたいだね」

火神は眉間に皺寄せながらとっ、と足早に黒子の横に並ぶ。

「火神：君は、いつもこんな風に朝迎えに来てたの」

「いや、俺がそんな面倒な事すると思ってるのか」

「……そんな事言ってもボクには分かんないし」

そのまま、二人は無言になり朝ぼらけの道を歩いていく。朝日はまだ出ていないが、空は白ばみもうすぐ日の出の時間がやってくる筈だ。

“太陽”

黒子はそれを思うと急に胸が締め付けられた。

「…荻原君は今頃どうしているだろうか。」

ボクの事を心配しているだろうか。

「なあ、黒子」

思考の海に沈みかけた黒子は火神の声で現実に戻った。ちゅんちゅん、と雀の鳴き声が空に響く。

「……お前が…その、違う世界の黒子だとしたら、この世界居た黒子はどうなったんだ」

まだあまりにも非現実的な事態を理解したくないのか、もしくは言葉に出すのに抵抗があるのか歯切れ悪く言葉を紡ぐ火神の声を聞きながら、黒子は目を見開いた。

「……あ」

「おい待て、今更気付いたのかよ」

呆れた様に此方を見る火神に黒子は

「…しようがないじゃない、自分の事で精一杯なんだよ」と不機嫌そうに返す。

「んで、どうなんだよ」

そう火神に促され、黒子は人差し指を顎に当てて少し考え込む。

「…仮定の、話だからね。ボクにも実際は分からないけど…多分、こっちの黒子はボクの居た世界に居ると思う。入れ替わったと言えば分かりやすいかな。」

くるくる、と宙で指を回す黒子を火神は横目で見ながら

「……なら、一応黒子は無事なんだな」

と肩の力を抜く。

「多分、だけどね」

「多分つてお前…！」

「大丈夫、入れ替わったんならあっちの黒子の隣には荻原君が居る

…悪いようにはしないよ」

彼、見掛けによらず良い人だから、と何処か遠い目をしながら黒子は微笑んだ。

「そっか」

「うん、そうだよ」

「…そっか」

…そうだ、黒子の隣には必ずと言って良い程“太陽”が居た。自分からそう仕向けたと言っても過言ではないが、“太陽”は側に居てくれた。この世界の黒子にとっての“光”と同じように。

だからきつと大丈夫だ。

少なくとも独りでこのどうしようも無い現実を溜め込んでなんていない筈だ。

きつと、荻原君は支えてくれる。何だかんだ言っても優しい人だか

ら。

そしてボクの事を心配してくれるだろう、ボクの隣にいる火神君のように。

「大丈夫、だよ」

そう、自分に言い聞かせて再び黒子は歩き出す。

そんな黒子の歩くペースに合わせてながら火神は黒子の後ろ姿をじい、と見詰めた。

昨日の五限目の本令が鳴ると同時に話し出した“こちらの”黒子の事。それを黙って真剣に聞いていた“あちらの”黒子の表情が段々と暗くなっていた。

俺が知る黒子の事なんて高が知れている。出身校と性格、自分との関係性、たったそれぐらいだ。

自分と黒子が過ごした時間はたった四ヶ月だ。それでも、他の奴等よりは知っている。…隣にいつもあいつが居たから。色々と話したから。友達、と言うには何か違う気がする。思考が違い行動が違う、何もかもが俺と黒子は正反対過ぎた。

それでも、バスケットで繋がっていた。そう、言うならば“相棒”なのだ。あいつが“影”で俺は“光”。臭い言葉だと思った。本当に。だけど、あいつのバスケットの姿勢は自分に衝撃を与えた。俺独りでは補えない事をあいつは補ってくれる。それが何だか嬉しくて、こいつになら任せられる、と初めてバスケットで人を頼った。

だからこそ、あいつの臭い言葉に乗った。あいつが自分を“影”と称すなら自分は望み通り“光”になってやろうと。ただ。

なんで、こんな訳の分からない事に。

す、と視線を下げて薄髪の少年を見る。

“黒子”であって“黒子”ではない少年。

あり得ない、そうであり得ない事が目の前にある。自分は、どうすればいいのだろう。普段回さない頭で必死に考える。

いつも俺はどうやって障害を乗り越えてきたんだろうか。
うーん、と唸っていると

「知恵熱だすよ」

と黒子にしてはやけに暖かみが籠った声で笑いながら言ってきた。
この笑みを俺は知らない。

「…今、悩んだってしょうがないよ。取り敢えず今は部活に行って、それから授業を受けて…またそれから考えようよ」
しゃべり方も、黒子から遠く離れている。

「…お前は昨日この状況を受け入れる、って言ったな。…どうするつもりだ。」「どういうこと?」

「そのしゃべり方も表情も黒子じゃねえ、って言ってたよ。昨日は結局そのまま帰ったけど…朝練に出るんだろ?すぐに怪しまれるぞ」

ふとその状況を想像して火神は青ざめた。なんとかため口で若干表情豊かな黒子に慣れて来たが、やはり鳥肌が立つ時がある。

……絶対部員全員が青ざめて恐ろしい事が起きる前兆では無いかと騒ぎ出すだろう…いや、絶対騒ぎだす。

有らぬ方向に空想が行った火神に気付かず黒子は人差し指を立てて「ああ、それなら。出来るだけ無表情且つ淡々とした言葉で喋れば良いんでしょ?…あ、後誰にでも丁寧語だったんだっけ?」

何だか他人行儀だなあ、こっちのボクは。
と言い放った。

はた、とそれが耳に入った火神は

「“こっちの”黒子の振りをするのか」
と強張った表情で黒子を見る。

「……そう、だよ。その方が混乱が少なくて良い。ボクの事を知っているのは少人数…いや、君だけの方が良い。」
そうでしょ?と黒子は首を傾げる。

何だかそれが酷く不快で、ざらざらとした物が胸の内で混ざり合う。
「そうか、よ」

自然、出た言葉は棘が含まれていた。

「……………どうして、そんな顔をするの？」

戸惑った様に火神を見詰める黒子に

「どんな顔だよ」

とぶつきらぼうに返す。

すると、黒子は意外な答えを返してきた。

「悲しそう…いや、寂しそう？」

そう、黒子に言われて初めてこの胸に渦巻く感情が何か分かってしまった。

この不条理な状況に対しての怒りと苛立ちと思っていた物では無く

「そっか、良かった。君も寂しいんだね」

同じ、だね。

黒子はそう言いながら柔らかかに、しかし寂しげに笑う。

嗚呼、そうか。

俺は寂しかったんだ。

黒子が、何時もの黒子が居ないことがどうしようもなく寂しかったんだ、と火神はゆっくりと目を閉じた。

「おっはよー黒子君！火神！ちょっと遅いよー、早く準備してランニングしなさい！」

目の前にある少女の顔に、黒子はぱちくり、と目を白黒させる。

扉を開けようとしたら、勝手に開いて女の子が目の前にいました、なんて状況であった。

淡い栗毛のショートカットにつり目、いや猫目のそれは大きく少女の性格を表すかのようにくりくりと世話しなく動く漆黒の瞳。

整った顔だな、と一般の男が思う事から離れて黒子は『何故この人はボクの姿を認識しているのか』という疑問符を浮かべた。

「あ、やった！驚かせる作戦成功！いつつも黒子君には驚かされるからね、仕返しよ！」

よっしゃ、と手を軽く掲げる姿はなかなか可愛らしいものであったが黒子は未だに目をぱちぱちと見開いていた。

「…あれ、黒子君？どうしたの、そんなに驚いちゃった？」

ひらひら、と目の前で手を振られてやっと黒子は冷静になった。

「あ、いや何でも無い…無いです」

ため口を言いかけて咄嗟に丁寧語をだす。はてさて、目の前に居る少女は一体だれだろうか。火神に目をやりと、しょうがないな、と言うように火神は溜め息を付きながら

「ほら、カントクは邪魔しないで下さいッスよ、さっさと着替えたいで」

としっしっ、と手を振る。

「なにをー！遅れてきたのはそつちでしょ！ほら、とつとと行く！それとも飛び蹴りかヘッドロック喰らいたい…？とにっこりと笑った彼女に

「いや、結構つす！ほら、黒子行くぞ」

と慌てた火神がぐい、と黒子の背中を押してくる。

「うん…いや、はい」

それに戸惑いながらも僅かに黒子は安堵して、のそのそと火神についていった。

二人きりの部室でやっと黒子は口を開く。

「…カントクって女の子なの？てつきりマネージャーかと思ったよ丁寧語ではなく、ため口で言う黒子に火神は辺りに目を配らせた。

「あーそうだな、驚くよな」

あいつはこのバスケット部の監督で、本名は相田リコで学年は一つ上だ。そう説明する火神に黒子は感謝しながら着替えを進める。

「ちらほら、…いや知らない部員の人が多いからその都度フォローしてくれる？」

「知らないって…どのくらいだよ」

「キャプテン以外全員。」黒子の言葉に火神は目をひん剥いて驚いた。ついでに口も戦慄している。

それから盛大な溜め息と共に

「…分かった、出来るだけな。まあ細かい事は気にすんなよ…最終手段は休めばいいから」

と何処か投げやりに言った。

「うっん、休めば調子を取り戻せなくなるから、絶対に部活に出るよ」

相変わらずバスケットに関しては真っ直ぐだな、と思いつつも、そっか、と呟いた火神の瞳に穏やかに微笑んでいる黒子と無表情な黒子が重なり、ぶれて映る。

「…？どうしたの？」

火神が怪訝そうに宙を見ている事に気付き黒子は首を傾げる。

一方火神は今、自分が一体何を思ったのか分からなくなり混乱していた。

…相変わらず？

何でそんな言葉が。何であの黒子と此方の黒子が重なった？

「いや、何でも」

火神はそう言つて黒子に背を向けて歩き出す。

扉を開ける動作が嫌に荒々しかった。

キュツキュツと体育館に響き渡る靴が擦れる音。

汗が流れ落ちて来るがそれすら気にせず部活に打ち込む。流れるように自然と黒子にボールが行き渡る。

それはもう反射だった。

「黒子！」

そう、叫んだ。

手を伸ばした瞬間、パシツという刻みが良い音と共に掌に心地が良い重みがかかる。

筈だった。

「……！」

刻みが良い音は、一瞬　　いや、誰にも分からないはずを伴って響いた。ただ、受け取った本人だけに分かる感覚的なずれ。

一瞬黒子は戸惑ったのだ。己がパスする相手が違う事に。そして、だとするならば。その戸惑いを差し引いた場合その感覚的なずれはどうなる。

もう一度、パスの瞬間が訪れた時、火神は目を見開く事になった。同じ、だ。

相手に合わせてプレーをする、黒子のバスケット。 “影” に徹し “光” を支える “黒子のバスケット” と……同じ、だった。

強いて無表情を努める “あちらの” 黒子と、 “こちらの” 黒子が再び重なる。

それに戸惑った火神は無意識にボールを落とした。その隙について先輩達がシュートしていく。

しかしそれすら火神は目に入れずに真っ直ぐに視線を黒子を捕らえる。

気まづげな表情が、此方を見つめ返した。

「火神、黒子君！ どうしたのよ、ぼけっとして！ 体調悪いんなら少し休みなさい！ そんなでさっさと気を引き締めなさい！」 ぐいぐい、と黒子の背中を押す小さな掌。 あわや転けそうになりつつもカントクにすみません、と言って体育館端に座り込む。
隣に間を開けて火神も座り込んだ。

「……同じ、なんだな」

「え？」

「……表情も、性格も違うのに……バスケットのプレーはまるっきり同じな

んだよ…吃驚した……」

そう言つて顔を伏せた火神を黒子は横目で見つめる。

「吃驚したのは、此方の方だよ。……荻原君とプレーが似すぎて…一瞬君とではなく荻原君とバスケをしている錯覚に陥っちゃったよ」
ふっ、と悲しげに微笑んだ黒子は体育館の天井を仰ぎ見た。

さらり、と薄い髪ゆれる。腕の隙間から、それを見ていた火神は突然顔を上げて黒子の頭を掴んだ。

そしてまじまじと頭のある一点を見詰める。

「なあ、お前最近頭の怪我とかしたか？」

「いいや…どうしたの？」

「……有る」

何が、と言う黒子の声を遮って

「頭の、傷が有る……」

と火神は呟いた。

火神君の話によるとこうだった。インターハイ直前の練習試合で黄瀬君がいる学校と戦ったボクは、黄瀬君との接触によって頭に怪我を負った。血が流れるほどだったので、見てみると小さいながらもパツクリと傷口が開いていた。なんら後遺症は無かったが、傷痕が残ってしまった。

「黄瀬君と、つても驚きだけど…ボクは最近怪我なんてしてないよ？」

なんで？と疑問符を浮かべる黒子の頭の傷痕を火神は指先で撫で上げる。

それがくすぐったかったのか、ばしっ、と黒子は火神の手を払った。

「痛てえ」

すかさず火神は文句をたれる。

「…なんか背筋がぞっとしたから止めて。…多分だけど…もしかしたら入れ替わったのは精神だけかもね」「は？」

「身体の入替わりよりも精神の入替わりの方が楽なもの、うん、きつとそうだ」

黒子は一人で納得してうん、うんと頷いている。

「だからなんだってんだよ……」

「うん、精神の入替わりなら結構簡単に元に戻るかも知れないって事」

「その根拠は」

「無い」

きつぱり、といっそ清々しげに返す黒子に

「駄目じゃねえかよ……」

と此方が落ち込んだ。

「……そだね、どうしようもない事だし、今は受け入れているだけで精一杯だ。でもさ、君が居てくれて良かったよ。少なからずとも君の隣ではボクはボクらしく振る舞える。結構、きついんだよ？自分を偽るなんて。」

しかも無表情だなんて……いや、ボクだって基本的には無表情だけど表情はそれなりに豊かだよ？こっちの黒子のアルバム見たけどあれは完全に表情が無すぎだなあ……

隣で喋りまくる黒子に火神は再び溜め息をついた。やはり非常に調子が狂う。

「お前って……結構お喋り？」

「いや、全然。んー溜め込んで溜め込んでそれから話すから……その時はそう思われるかも」

「……やっぱり違うな、あいつは人の都合なんてお構い無いに言いたい時にきつぱりスッパリ言う奴だから」「そう」

「そうだ」

「……安心したよ」

「何が」

「……“こっちの”黒子ってそんなに無表情で淡々としてるって聞いた時から一体どんな辛い思いをしたのかな、って心配になったんだ。」

でも」

「でも?」

一呼吸、置いて黒子は喋り出す。

「君が居るから、安心だね」

ゆっくりと穏やかに笑みを浮かべる黒子。

それは、あまりにも自分が知る黒子とは違っていて。

「…今は、此処にいねえだろうが」

…ならば、この違いはなんだ。

“あちらの黒子”と“こちらの黒子”には一体何の違いがあった?こんなにも違う人間が出来上がる?

火神は目の前にいる黒子がそうだね、と言つのを横目に捕らえながら、答えが出ないそれを考え続けた。

Wednesday

同一線上の邂逅

type:03 - a | l i g h t & a m p . . m o o n

0
9
1
2
3
1

.
. .
t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

感覚的盲点の疑惑 (sun&shadow) (前書き)

荻原 (読み切り) と黒子 (連載) の水曜日のお話です。

感覺的盲点の疑惑 (sun & amp; shadow)

Wednesday

03 - b . (sun & amp ; shadow)

「大丈夫」

そう呟いた。

全然大丈夫じゃないけど、自分に言い聞かせるように何度も呟いた。何故なら、言葉に何度も出したら願いを叶える事が出来る、と教えてくれたのは彼だったから。

だから。

「大丈夫」

とまた呟いた。

町が静寂に包まれた深夜1時過ぎ。

住宅地の一角に煌々と闇を照らしている家がある。

二階の部屋の窓を開け放ち、網戸だけを締め切った夏ならではの涼の取り方をしている部屋からパラ、パラ、と紙が擦れる音が微かに響いていた。

「……へえ、結構いいですね、詩集というのも」

ベッドに寝転がりながら手にした本を眺める。黒子が今手にしてい

るのは『ニーチェ詩集』。ベッドに隣接している本棚には多量の本が詰め込まれている。

ニーチェ詩集、ハイネ詩集、ディラン・トマス詩集……

詩集が主だが、たまに写真集やら文学作品、近年映画化、ドラマ化された作品の原作が所狭しと並んでいる。その端に立派な装丁のアルバムがある。

『平成 年度 昭栄中学校 卒業アルバム』

小さく、ぼそりとそれを声に出して読んでみる。……感慨も哀愁も何も無い。

何故ならば、僕はこの中学校を卒業していない。

僕が卒業したのは『帝光中学』だ。

現実を受け入れる事が出来ずに再び詩集に視線を戻す。

けれども、文字が滑って頭に入ってこない。

：僕が読むのは近代文学が中心だ。夏目漱石、芥川龍之介、森鷗外諸々の、明治大正昭和を通しての独特の雰囲気がある、あの世界。黄ばんだ本にそっと触れて閉じた世界を覗く。空けた瞬間に広がる、どことなく哀愁が漂い読み手を永久の旅へと誘うような、あの世界……。

パラリ、パラリと無造作にページを開く黒子の心に浮上するのは、

“ 帰りたい ” ただそれだけ。

何をすればいいかなんて明確には分からない。

ただ、知ろうと思う。

否、知らなければいけない。

この世界で、穏やかに笑う “ 黒子 ” と僕の違いを一つ一つ、知らなければ。

そして、僕は僕自身の足場を崩さない為に、「僕は僕自身でいる」ことが重要だ。

僕は誰にもこの状態を離さない事に決めた。……自分の不安に押しつぶされて、今一番近くにいる荻原君がそれを受け入れてくれなかつたら、僕が僕で居られなくなる。

何回も、そう何回も崩されてきた足場を、また崩すなんて御免だ。僕は、僕自身でいる。誰の振りもしない。

それに、荻原君が此方の黒子とどれだけの絆があったのか確かめた
い。

もし、それが確固たる物ならば、荻原は気づくはずだ。

僕が、荻原君が知っている“黒子テツヤ”ではない事を。

……火神君は、分かっているだろうか。

穏やかに笑う“黒子”が“僕”ではないということ。

分かってくれているだろうか。

そうならば、少しは報われる。それを知る術はないけれども。

「大丈夫」

自分にもう一度強く言い聞かせ、ぐしゃぐしゃになったベッドのシートを広げて、僕は詩集を閉じた。

朝焼けは、いつだって綺麗で人の心を洗ってくれる。

そう文学的表現が浮かんでくるほど、今日の朝焼けは綺麗だった。

遮光カーテンから零れる赤い光に、赤髪の少年を思い出す。

きゅっ、と目を絞って再び開ける。

広がっているのは、微かな違和感しか持たない薄暗い部屋だけだった。

……今日こそは、部活に行こう。この二日間、まともに部活をしていなかった。ウィンターカップに向けて取り組んでいるのに、この様では皆より遅れてしまう。そうでなくても体力がないのだ。

……火神君が居ないからって、こればかりは気を抜くわけにはいかない。

そう決めてのそのそと二階から降りる。

「あら、今日は早いわね。気分は良くなったの？」

母親の心配してくれる声に僅かな安心を得て、ゆるゆると口元の筋肉を持ち上げる。

「…ありがとう、大丈夫だよ」

「そう、朝食用意しているからさっさと食べて部活頑張ってるしやい。勉学も疎かにしちゃ駄目よ？」

「分かってますって…」

いつもの、そういうものの朝の風景にじんわりと心が暖かくなり、目を細める。今の黒子にとって、この家族と過ごす僅かな時間が心の支えになっていた。

たとえ仮初の、“僕”の家族ではない事は重々承知だ。

でも、世界は違えど親の暖かみは等しく同じだった。

暖かい。涙腺が緩みそうになるのを必死で堪えながら、黒子は朝食を掻きこむようにして食べた。

「ごちそうさま。ありがとう、おいしかったよ」

「お粗末さまでした。頑張ってるね、テツヤ」

「…はい」

いってきます、と言う僕の背中にいつてらっしゃい、と声をかけてくれる母の存在に、黒子はもう一度感謝して玄関を閉めた。

更衣室を開けて、一番先に見つけたのは金髪の少年だった。

…もうすでに朝練をしていると思ったのに。そうの中で思いながらも黒子は動揺を隠すように

「荻原君、おはようございます」

と強いて淡々と挨拶をする。

普通に、僕らしく。震えそうな心は無理に押さえ込んだ。

「…おはよう」

どこか、不機嫌そうな荻原君の様子には気付かない振りをして横を

通り過ぎる。

しかし、不意に伸びてきた手にそれを阻まれ重心が揺らぐ。足が交差し纏れているのに気付いた時にはもう黒子は荻原の方へと倒れこんでいた。

「いつつ……」

そのまま倒れこんでくるとは予想だにしなかったのか、荻原君は目を見開きうろたえた様に口をパクパクとさせていた。

「…何するんですか、痛いです」

「え、あ、ごめん。そんなつもりは…」

しどろもどろで、先程までの不機嫌さはどこに行つたのだろうか、事故にしる胸の中にいる黒子の存在に荻原はかなりうろたえていた。「分かってますよ、もう良いですから手を離して下さい」

上手く立てないんですよ、ほら早く。そう促すと荻原は素直に手を離した。

「着替えてきますので、荻原君は先に朝練しておいて下さい。すぐに行きます。」

荻原は何か言いたげに口を開け、そしてつぐむ。そしてもう一度開け、

「おう…」

と力ない返事をして踵を返す。

更衣室の扉を開けた荻原のどこか寂しげな背中をただ黒子は見つめていたが、扉が音をたてて閉まる瞬間、興味がなかったように自分のだろっロツカーを開けて中を覗き込んだ。

朝からまじめに部活動したいというのに、体育館に入ると問題の一年坊（大）の方が呻きに呻いていた。

「…おかしい、絶対におかしい」

ぼそり、と人よりも頭一つ分でかい大男が不機嫌を巻き散らかしながらばやいているその様はどこか不気味で周りの部員は後ずさった
り引き攣った笑いをこぼしている。

どうしてこいつらはこう問題を部活までに引き込んでくるのだろうか、と悶々と思いつつも人が良い柏木は

「なーにおかしんだ？大きな声で独り言を言うなら主語を言え主語を」

と呆れ調子で問いかける。後ろから聞こえてきた声に荻原は振り向く。

呆れ調子ながらも、どこかにやけた…いや優しそうに微笑んでいる男が立っていた事に驚いたのか、荻原は細い目を見開いている。

「キャプテン……」

キャプテンこと柏木は右の眉をあげて答える。

「……いや、その…黒子が、おかしくて」

「ふーん？そっぴい最近あいつ部活に来てねーよなあ、一年坊のくせにいい度胸だな、ほんと」

うわあ、キャプテンの二重人格発動しちゃった！！と二年がざわざわと騒ぎ出す。

で？と続きを促す柏木の表情はあくまで優しげだ。ただ、目は黒々としていて少しも優しげでない事が一目瞭然だが。

「…なんか、白々しいっていうか…あいつ、月曜日に頭打ってしまった時にどっかおかしくなったのかも、って思って」

「黒子が変わるのはいつものことだろうが」

「いや、そういう意味ではなくて」

「喧嘩、したのか？」

「…喧嘩というよりは…いや、やっぱり俺が気付かないうちに何かしちまったか…？」

いや、でも…と再び自分の世界に入ってしまった荻原を目の前にして、柏木の限界はピークに達する。今まで保っていた笑みがついに壊れた。うん、壊れた。二年生、果ては新入部員までも憐憫を含ん

だ瞳を湛えて、うん、と頷く。

「だあああああああ！！！！うっとおしい！！問い詰める問い詰める何が原因か分かるまで相手が参るまで問い詰めて問い詰めてお前が悪いんだったら素直に謝っとけ！！部活に不穏な空気を持ってくるな巻き散らかすなうざい！！うっざい！！！！」

……結局切れちゃったよあの人。と体育館内に不穏な空気が流れている。

そんな空気の中、

「遅くなってすみませ…あれ、どうしました？」

と、のこのこと渦中の人物が体育館内に入ってきた。…ご愁傷さま。再び部員の表情が引き攣るが、黒子はそれを介さずにまっすぐに柏木の元へ向かっていく。

「キャプテン」

堅い声が館内に広く響いた。

「無断で部活を休んでしまっ…すみませんでした。今日からまた頑張りますので、これからもよろしくお願いします」

至極丁寧かつ、どこか事務的でしかし誠意が籠っている言葉にキャプテンは眉を顰める。

……おかしい。

そう、どこか、なんてことは分からない。

ただ、おかしい。違和感をひどく感じる。

付き合いは短いにして、自分の知っている黒子はこんなにも事務的で淡々としていない。

ちらりと萩原を見ると自分と同様に眉を潜めていた。

…これか。おかしいと言った理由は。

「…キャプテン？」

不安そうな声色とは裏腹に身長差の所為かどうしても上目使いで見えてくる黒子の様子をまじまじと観察する。

無い。無いんだ、こいつには。

ふと思いついた言葉に柏木は内心頷く。

今、目の前にいる黒子には“余裕”が無い。

そう表すのがしつくりきて柏木は思わず片方の口角を上げた。

「キヤプテン？」

空気が動いたのを感知したのか、それとも黒子を心配して俺に言葉を促そうとしたのか分かりはしないが、荻原は不審げに此方を見つめてくる。

見るなうざい。男に見つめられても気持ち悪いだけだ。

と心の中で思った筈がいつい言葉に出してしまいつつも柏木は今日初めて、本当に穏やかな笑みを浮かべ黒子に答えた。

「そうだなー、だったら無断で休んだ罰として今日明日の部活後掃除はお前に任せるわ。あ、荻原も追加で」

「はあ！？なんで俺も！？と横で喚く大男が居るが気にしない。というより満面の笑みを湛えて黒々とした瞳を荻原に向け

「愚痴を聞いてやった際の俺の労力とそれに付随した不快感と心配かけさせたお詫びプラス無断で休んだ黒子を無理にでも引っ張ってこなかったことへの不能さと相棒としての連帯責任、ということでは話は終わりだ、とでも言うように、はい決まり〜、とパンパンと両手を叩いて部員を練習へと促す柏木に荻原は至極情けない声で「そんなぁ…」と呻いている。

「ま、黒子。頑張れよ」

と目の前で所在なさげに佇む黒子の肩をぽん、と叩きながら柏木は穏やかに笑う。

それは、不逞の弟を持った兄がしょうがなさげに見守る光景にも見えなくはなかった。

「…はい」

強く答える口調とは反対に、不安を湛えた瞳を隠そうともしない黒子から頂垂れている荻原へと視線を移す。

「荻原あ！！さっさと立て！不抜けた面して部活内のテンションが落ちたらどうしてくれる！」

はい！と飛び起きる荻原に柏木はぼそりと呟く。

「…黒子がおかしいのは、多分、黒子自身の問題だ…支えてやれよ？お前は黒子の相棒なんだから、な」

「……っはい！！」

とたん、活気が戻る荻原の単純さに苦笑いしながら、柏木は練習へと向かっていった。

『支えてやれよ？』

いつも優しげに笑っているくせに、腹黒いキャプテンから漏れた激励に荻原は内心燃えていた。

そうだ、何だかんだ言ってもこの部活内では…いや学校内かもしれないが、多分俺が一番黒子の近くにいる筈だ。

黒子が悩んでんなら、支えてやらなくては。

そう不安を一掃して、拳を握りしめた筈だったが。

「おかしいな」

「いやいやまたかい」

「おかしいんだよ、本当に…」

黒子どうしたんだあ〜と図体に似合わずに嘆き苦しむ男に、茶髪の男は苦笑いしながら背中を叩く。

教室にざわめきに掻き消されているが、なかなか情けない声だ。

「まあまあ、そう簡単には悩み解決！なんていかないって。それに数日したらけるって普通になっっているかもしれないじゃん！」

茶髪の男はバスケ部の一年次の仲間だ。軽い風貌とはかけ離れた柔らかいプレーが今後注目されるだろう、荻原の次に期待されている一年だった。

「悩みなんて、悩んで悩んで悩み通してさ、そんでなんで悩んでたか分からなくなっただけですっぱりと切り替えられるもんだよ」

大丈夫！とその場凌ぎの軽い慰めに荻原はどんよりとした表情を茶髪男に向けた。

「それは普通の奴の話だろ…」

黒子はなんか…普通じゃないんだよ…っーか、いつも飄々としていて掴めないってか…とぼそぼそと悩む荻原に茶髪はため息をつく。

「俺さ、はっきり言っただけ黒子の事よく知らないんだわ」

だからお前がおかしい、って言ってもよく分からない。そう言う茶髪は完全にこの話に興味を失っているようだった。

「…ああ、強いていけばさ今日の黒子はなんか不安げだったな」

どうでもよさげに言ったにも関わらず、茶髪の発した核心めいた事に荻原は思考を向ける。

自分もそれは薄々感じていたが、他人からはっきりと言われると確信がもてる。

…そうだ、いつもの黒子はもっと飄々としていて、俺より遙かに低身長癖にいつも余裕があつてなんだか見下ろされているような感覚があつた。

帰国子女としてアメリカに長く滞在していた荻原にとっては、それがむかつく時もあったが、救われているところもあった。

育った環境によるものだろう、荻原は基本的に個人主義である。

そんな中、個人主義とはほど遠い日本に帰ってきた荻原は日本の集団主義に嫌悪感を感じていた。

どちらが良いとか悪いとかではない。育った環境、文化の違いが、荻原をそうさせたのだ。

その個人主義の荻原にとっては黒子は重宝すべき友でもあり、相棒だった。

黒子自身、異質な存在だった。存在感が無い故に孤立している。そして黒子自身はそれに慣れきっていて、それが当たり前と思って過ごしていた。

集団主義の中に育った、小さな綻びは個人主義とは似ても似つかないが荻原にはありがたかった。

そして荻原に、協力して物事を達成すると言う集団主義が少しずつ根付いていた。徐々に変わっていく自分の横に黒子がいる。それは

荻原にとって安心とも言える事で、最初は不快に思っていた事が嘘のようだ。

いつも余裕に満ちた表情で俺に笑いかける黒子はどう思っていたかなんて知らない。

互いに深くは干渉しない代わりに、いつも何処かで繋がっているような感覚が荻原にはあり、それに安心して胡座を掻いていた。

だけど、今回はそもいかない。

今回ほど黒子の事を親身に考えたことは無かったが、どうしても知らなければならぬ。

いつも浮かんでいた、穏やかな笑みが抜け落ちるほどに無表情な黒子を荻原は放って置けなくなっていった。

「あれ、居ない…薄情な奴」

茶髪は既に何処かに行つたようだ。

いや、そう言えば先に帰つておくと言っていた。

…確か、次は移動教室だったはず。既にクラスの殆どが教室から居なくなっていた。…何時もは一緒に行く筈の黒子も、居ない。

「……おし」

もう一度拳を握りしめて、荻原は教室を後にした。

「だあほ、またお前は…」

体育館内に呆れたキャプテンの音が響く。うん、分かってる。分かっているゆえに悲しすぎる。

「すみません…」

結局、なんの収穫も無いままだ。どこをどうしたらクラスが同じで、確かにいるはずの黒子に会えずに終わるんだろうか。あり得ない。

あり得なさ過ぎて涙が出そうだ。

ああ、そうだった、あいつは人の死角に潜り込むのは大の得意だっ

た筈だな。

「……完全に、避けられているんですよね」

「あー嫌われたなあ荻原。ご愁傷さま」

ぼんぼんと背中を叩く柏木はもはやどうでも良さげだ。

うー、と呻く荻原の視界に、薄茶色が揺れる。

「あれ、あの子誰ですかね」

体育館玄関のガラスに寄りかかり、此方をじつと見てくる少女を指さす。

キャプテン知っていますか？と問うと知らない、と首を振る。

「大方気のある男子でもいるんだろうよ、気にすんな」

キャプテンの声を聞き流しながら、少女の容姿を何となく見つめる。薄茶色のショートカットの髪が風に揺れて、どこかぼんやりとした雰囲気にも見えた。遠目からだから良くは分らないが、目を伏せていて顔がはつきりとは分らない。しかし、多分目を開けば猫目の大きな瞳が印象的だろう少女に荻原は目を奪われていた。表情が、酷く似ている。

誰と、かなんてそんな事分かっている。

最近の黒子の表情と少女の表情がまったく同じだった。

それが何を表すなんてそんな明確な答えは分らない。ありたいいな言葉で表すならば、“後悔”“不穩”だった。

キュッ、とバツシュが床をする音がして我に変える。ふと見渡すと、すぐ近くに黒子が居て思わず後ずさった。

「荻原君、僕達はパスの強化ですから、さっさと練習しましょう」
淡々とした声と他人行儀な態度に眉を潜める。

ふる、と頭を振り不穩な思いを一時的に退避させる。……今は、部活に専念しよう。

おう、と答える荻原を待つてから黒子は踵を返した。

キュッキュッつと体育館にバツシュの擦れる音が広がる。

汗が動く度に弾け飛び、目の前を球体となって飛んでいく。

何人かでチームを組み、簡易ゲームを繰り返す。ゲームの流れで黒

子にボールが行き渡る。

それが分かったとたん、反射に似た鋭い習慣が体を自然に動かした。

「黒子！」

そう、叫んだ。

手を伸ばした瞬間、パシツという刻みが良い音と共に掌に心地が良い重みがかかる。

筈だった。

「……！」

刻みが良い音は、一瞬　いや、誰にも分からないずれを伴って響いた。ただ、受け取った本人だけに分かる感覚的なずれ。

それは何度繰り返しても、修正される事は無く、何度も何度も荻原に不安と一筋の疑問が浮上する。

ふと思う。目の前にいる黒子は俺に対して怒っているのでは無く、不機嫌でも無く。ただ素でいるんじゃないか、と。

その思いに行き着いた時、荻原は視界がぐらりと揺れる感覚に捕らわれた。

今日の前にいる存在が“黒子”とは違う全く別物ではないのか、という考えがぐるぐると頭の中を駆け巡る。

目を一杯に見開いた俺を黒子はただ無表情に見つめていた。

視界の端で薄茶色が揺れた。

．．．to be continued

感覺的盲点の疑惑 (sun & amp; shadow) (後書き)

ええと、今回は荻原視点、柏木視点から話を進めさせて貰いました。黒子視点も少しはありますが、今回の対比は「前進」と「停滞」です。

読み切り黒子は少なくとも「前進」しようとしています。連載黒子は誰にも話さず、内に隠って「停滞」しています。

そんな二人の隣にいる火神と荻原の心に渦巻くのは“不穏”

今回どちらの話にもヒロインが出てきました。

こちらでも対比していく予定です、捏造話で

話変わりますが、アメリカの個人主義：低俗に言つと“俺だけが英雄ならそれで”と日本の集団主義の“協力して物事を解決しよう”とではいさかいが生じても仕方ないですよ。文化形態が違うんでしょうね。∴日本は災害大国だから、集団主義になるのは致し方ありませんよね。

100427

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1403/>

人生最大逃避行

2010年10月21日21時07分発行